

俳句雜誌

令和元年十二月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十二巻第十二号

水 明

2019 12月号



信 風 節 季



道祖神

村境 峠などにあり

悪霊や疫病の

侵入を防ぐ

辻にあつては

道行く人を守る

写真の道祖神は

その形から

夫婦円満の神とも

水 明

第1071号

―歴代主宰の一句―

白の上に猫が乗りけり年の市

長谷川かな女

冬の鳥胸紅ければ通ひ合ふ

長谷川秋子

雪ばんば平家の裔の憂ひかな

星野紗一

水明

令和元年
12月号

歴代主宰の一句

夕陽の水車(作品)

山本鬼之介

4 1

一の糸(近詠)

由良ゆら女

6

令和元年十月(近詠)

網野 月を

7

大向うより 主宰作品の鑑賞

西山貴美子

8

季音「雪」(同人作品)

山中みどり 吉住 光弥	由良ゆら女 ほか
----------------	-------------

10

季音「月」(同人作品)

丸山マスマ 柚木 治子	藤澤 喜久 ほか
----------------	-------------

17

季音「花」(同人作品)

加藤草太郎 原田 想子	梅澤 佐江 ほか
----------------	-------------

21

鼓 笛 集 (同人作品)・私の一句

64

現代俳句鑑賞

網野 月を

26

金の鈴銀の鈴 季音月評

町野 広子

28



集 特 家 作
 (大村 節代)

俳句と私
 自選五十句
 黄水 仙
 ずうーと青春
 節代の一句

大村 節代 30
 山中 順子 36
 星野 和葉 38
 40

水 明 集

曲淵 近藤 徹平
 正木 萬蝶 ほか

水 明 集 作 品 評

水 琴 窟 (水明集十月号鑑賞)

山本鬼之介 58

俳誌望見

池田 雅夫 62

句集喝采

梅澤 佐江 25

第三回水明塾

境 延昭 71

水明の記事掲載他誌転載

井口 俊晴 67

水明例会報・各地句会報

86・87・88

新珠賞作品募集

74・77

新春俳句大会・九十周年のお知らせ

83・84

風声・水明発展基金御礼・後記

57

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

夕陽の水車

山本 鬼之介

千年や「染井」に今も秋の水

ミツシヨンの生徒の靴にこぼれ萩

秋灯の和紙のシェードも揚羽亭

瀧 行 の 禰 つ か れ 冷 ま じ や
逆 剥 け の 指 を いた は る 秋 の 暮
晚 秋 の 夕 陽 あ ま ね く 水 車 小 屋
紅 葉 か つ 散 る 宿^{しゆく} や 彼 の 日 の 和 宮
た の も し く な り し 記 念 樹 文 化 の 日

一の糸

由良 ゆら女

満席の頭上に冴ゆる一の糸
行く年の背あざやかに主遣ひ
年の果封印切りの銭の音
しぐるるや睫毛ににじむなにわ橋
こそばゆく礼申しけり配り餅
乾杯にポイントセチアが声合はす
独り居の月日はるかに除夜の鐘

人間国宝級の太夫と三味線弾きの紡ぎ出す文楽の浄瑠璃が好きだ。太棹の一の糸は天を、三は地、二は天と地の間の人間界を現わす。一三二、ででんでんでで太夫が人間界の人情晰を語りだす。高い舞台下駄で重い木偶を操り、指先きや目の動きも見事に表現する主遣ひ、その名人の只立っている時の品と気迫ある背中に見蕩れる。

外は浪花の年の暮、寒風の中を人も車もあわただしく往き交う。私も家路を急ぐ。

令和元年十月

網野 月 を

台 風 禍 夜 空 に 光 る ま ろ き も の
サ イ レ ン や 午 前 三 時 の 静 寂 を
ラ グ ビ ー 場 神 風 き た る 神 無 月
芒 原 原 つ ぱ ほ どの こ と も な し
一 年 や 傘 は い ら な い 光 二 の 忌
抽 斗 に な い も の が あ る 即 位 式
仙 台 や こ こ ろ も と な い 菊 日 和

令和元年十月は色色のことがあった。数十年に一度の台風による災害、各種ワールドカップ、前主宰の一周忌、お役をいただいている現代俳句協会では痛恨事が出来た。死者へ手を合わせ、勇者に激高し、誓いを新たに、反省も頻りである。人には力の及ばないことがある。だからこそ全知全能の「神」を人々は思ったのかも知れない。毎日の祈りを大切にすることも知れない。月末に長女が結婚式をする。仙台出身の婿が出来る。涙する予定はないが、涙したとしても、うれし涙で十月を締めくくりたいものである。

大向うより

● 主宰作品の鑑賞

西山 貴美子

九月号

月鉾に月が応ふる街の辻

祇園宵宮である。祇園会の華やかさは宵宮にある、と言えよう。長刀鉾や月鉾が京都の辻々を巡るのは壯観である。コンチキチンの祇園囃子など、本祭当日よりも、なぜか宵宮の方が賑やかで、独特の雰囲気醸し出しているようである。

京都八坂さんの祭礼は、七月十七日の山鉾巡行や神輿渡御を中心に、ほぼ七月一杯行なわれる。祇園の神々も、さぞや御満悦の事と思う。

折しも、赤い夏の月が応えるような一夜であった。

祇園会や女ひと言「好かんだこ」

八坂さんにお参りしたのに、何があつたのだろうか。「好かん」は関西弁で（いや）とか（気に入らない）（嫌い）とかいう意味だが、「たこ」とまで言わせるのには、二人の会話や事の成りゆきを詮索したくなる。「たこ」は東京言葉でも使われ、坊主をさげすむような言い様である。

祇園会であれば、そのひと言も余りきつとは思えず、女の心も甘えも含んだ「好かんだこ」であるのかも知れない。

与の膳の夏の料理の迷ひ箸

涼しげな夏料理が見えてくる。さて、どこから戴こうかと思いつながら箸をつけるのも勿体ないような正式の膳立てである。一の膳、二の膳、三の膳。子供の頃から（迷ひ箸）は親に注意されたものだが、手をつけるのも惜しいような美しい涼しげな料理に箸が迷うのは当然である。

「与」という改まったような、如何にも偉そうな態度の言葉が久しぶりに聞いた。若者語が飛び交う昨今である。日中の暑さも吹き飛ばような痛快さを覚えた。

萬緑の森に居さうな迷ひ神

「迷ひ神」とは、説話集宇治拾遺物語にある、人を迷わす神である。作者未詳の物語だが、一、二二二年頃の成立と聞く。仏教伝説や滑稽談、民話、説話など、軽妙な和文脈で庶民の生活感情や人間性を語っている。萬緑の中であれば尚更に昔語りの鶴女房や浦島伝説、姥捨山などの民間伝説も甦ってくるような気がする。迷わし神は誰の心にも住みついているような気がしてならない。

民間伝説は心のふるさとである。

十月号

惜別の車窓の頬よ夜の秋

この風景は、現代の新幹線では味わえないような気がする。ブルートレインがあった頃の東京駅をなつかしく思い出す。ゆつくり動き出す車窓の横顔を追いながら別れを惜しむ光景をよく見たし体験もした。夕暮のプラットホームの雰囲気が好きで、用もないのに東京駅へ通った頃の事が思い出される。夜汽車のテールランプが小さくなるまで佇む駅舎は、もう秋の気配である。

ネイルアートの蝶目の前に秋暑し

一時代前はネイルアートの店などなかった。マニキュアが少し濃くないかしら等、気にしたものである。勤務先の支店長が派手好きで、マニキュアや口紅をつい塗り過ぎ、女性一同お得意様に注意された思い出がある。今思えばネイルアートの蝶など思いも及ばなかった頃である。今は睫毛のエクステなども流行っており、若い女性はますます美しくなった。少し派手で可愛い蝶のアートの秋の暑さが又戻ってきたような気がする。筆者は今、ネイルコートの真最中である。

近松の芝居がはねて十三夜

近松と言えば、門左衛門。江戸前中期の浄瑠璃・歌舞伎作

者である。浄瑠璃では竹本義太夫、歌舞伎では坂田藤十郎と、際物、世話物で活躍した。義理人情の葛藤により生じる悲劇が多い。はねた芝居は何だったのであろうか。(吃又)で有名な(傾城反魂香)であれば人形浄瑠璃である。何はともあれ、今宵は十三夜、豆名月である。

芝居のあらずじを振り返りながら仰ぐ陰曆九月十三日の月が心に染みるようである。

誰がための挙手の礼かな秋の海

「挙手の礼」とは、右手を開いて指を揃え帽子のひさしの右端にあげて相手に注目する敬礼である。軍隊式の挙手の礼は(敬礼)である。誰のための敬礼なのか。夏が去り秋の波が少し荒くなった海を見ながら、ふと寂寥感を覚えた作者の心が伝わってくる。今月のテーマは「敬礼」である。

ふと、誓子の(海に出て木枯帰るところなし)が浮かんだ。誓子のこの句に対して様々な解釈があるが、誓子自身は(自作案内)で(木枯は行ったきり、もはや、還ってくる事は無い。その木枯は片道特攻隊に劣らぬくらい哀れである)と言っている。

話がそれてしまったが、誓子の句のあいまいさに比べ、「挙手の礼」という具象的な表現により、現実の景がはっきりと目の当りに浮かんでくる。

季
音
雪



秋 出 水 山 中 みどり

人攫ふ牙を頭に秋出水
身に沁むや泥にまみれし里のこと
無住寺の櫃の実青く匂ひけり
落武者の塚に櫃の実五つ六つ
案内乞ふ銅羅の空鳴り秋の寺

捨かがし 由良 ゆら女

捨かがし十字架担ぎゆく農夫
千年の月日を孕み蓮は実
に敗荷や痛みて心の折れやすき
蓑虫鳴く草履にされし一張羅
鬼の子に夜は満天の星飾り

秋の声 吉住光弥

亭主亡き茶室の庭に秋茗荷
菊臚もつてのほかの菌ざはりで
虚貝の笛吹く浜や秋の声
海鳴りに洞爺丸の御霊秋の声
師も父もむかし討死濁り酒

葉音しぐれ 網野月を

秋風や葉音しぐれに抱かれる
テイクアウトの月見バーガー十三夜
若かりし頃のデニムを蒸し芋
口の中何故か渴きぬ虫の闇
ぶつぶつと罵りながら鱈日和

秋を往く 石井喜恵

秋を往く森深くして道遠し
捨て舟や鳴咽に似たる萩の風
稲雀散つて光りの礫かな
深爪の疼きし露寒の厨
里芋煮る味見の箸をつるり逃げ

にぎり酒 石山かつ子

実紫人去りし椅子そのままに
渦となり流れとなりて椋鳥の群れ
にこにこと爺のほまちのにぎり酒
観音の背中ふつくら新松子
説諭する父の本気や初時雨

蓑 虫 大橋 廸代

退屈な城の忍者と木樵虫
彼奴ならむ城の蓑虫危めしは
蓑虫の糞はひかりの雫なり
千塚の蓑虫と詠む憶良の碑
蓑虫鳴く夜はしのび出る引籠り

鴟 高 音 大村 節代

香合に小さな宇宙秋日和
真ん中に朔日まんぢゆう秋句会
紅葉山天狗か人か遠会釈
急ぎ足やがてゆる足鴟高音
釣宿に鉞力のバケツ鴟高音

暮 の 秋 栢尾 さく子

暮の秋別れは右手あげしのみ
秋の蛾のむくろ動きぬ躰口
水掻の急げ急げと鴨の川
夕疾風枯蓮いつぼんづつ立ちぬ
栗ごはんよく嚙んでゐるお年寄

冷 ま じ 菊池 ひろこ

冷まじや君の背骨もステッキも
空耳の翅音冷まじ蔓を引く
種多き野菜すさまじ白灯下
船頭に櫂を任せし紅葉狩り
飽食の県人会やそぞろ寒

日 脚 小林 萬二郎

秋簾早や日向恋ふ日脚かな
灯火親し明日の試験に仇取られ
おふくろは甘口好み菊臈
幼なより菊の香に住み逝きし友
ほろ酔ひの山歌所望秋の暮

旅そぞろ 五明 昇

秋鯖に手秤で振る伯方塩
アパート式通ひし峠草の花
弓張月従へて行く外航船
芋水車残して暮るる峡の宿
旅そぞろ口三味線に萩の風

秋 境 延昭

秋の水荒砥に当つる山刀
秋の昼ツアーがのぞく懺悔室
役者絵の写楽の謎や後の月
馬車で行く新任大使秋高し
踏みしだく窯の陶片秋の声

うすまぶた 椎野 美代子

身に沁むや父の声きく弟に
ピアスのダイヤ外し俄かにうすまぶた
すずろ寒籠の小鳥のうすまぶた
朝寒の貼り付いてゐる三面鏡
声にせば夜寒深まる膝頭

秋の暮 島津初花

染まらぬ色 永野史代

十六夜や車庫のシャッター下ろす音
手の平で頂く栗の重さかな
長靴の爪先で割る栗の毬
トランプの札返すごと刈田かな
白鷺の点となりたる秋の暮

色鳥や染まらぬ色は染まる色
湖面平らに落雁を待つてをり
身ほとりに夫うろろす秋思かも
路傍なる石には石の秋思かな
借景に浅間を置きてをみなへし

秋 思 鈴木康世

寧 日 西山貴美子

一通の文にうまるる秋思かな
写経終へ暫し秋思の寺座敷
喪心の少し解れて来し秋思
手に淡き残り香のある秋思の夜
来し方を三面鏡に見る秋思

暮の秋心に刺さる事もなや
石蹴れば音の転がる萩の道
焼栗を剥く熱熱の掌
長き夜の嬬座に在れば母恋し
長き夜の衣桁を滑るちよいちよ

秋 波多野 寿子

遡 上 星野 和葉

演奏の舞台華やぐ夜半の秋
糸・竹の語り高まる秋夜かな
最終章の余韻たのしむ星月夜
深秋の田に人の影けぶり立つ
カラス来る刈田刈田の通学路

生と死を見据ゑて鮭の遡上かな
鮭遡上満身力の固まりに
鮭を打つ女の棒に情少し
二人居てそれぞれ一人灯火親し
あの宴もしや鬼かも紅葉山

秋 思 服部 みどり

デビュー 茂木 和子

車椅子押されて秋思押すもまた
膝抱いて足の爪切る夜の秋思
土中に葉を忘れきし曼珠沙華
曼珠沙華ときには魔女の風車
秋思なほ夕焼は地におりて来ず

新松子突きてかぢりて鳥去らず
新松子公園デビューの赤ん坊
空泣きが本気になりて新松子
浜風に磨かれてゐる新松子
新松子只今ドラフト会議中

台風 森 千代子

まなざし 山中順子

会ふ人の多弁に台風語りけり
畑に立ち虫の音淋し水禍あと
夢一つ消えて行きたり台風過ぐ
雨音に覚めて身辺り冬近し
柿に光輪鴉同志が呼び合へり

栗拾ひうつしみの骨ぼきと鳴る
母に似し親指の反り栗を剥く
秋の昼深まなざしの聖母像
献上の醬を仕込む鴟の晴
抱くものに膝と希望と檸檬二ヶ

(順送り)

秋 裕 矢作水尾

隣り合ふシヤネルの五番秋裕
連山の襞といふ襞霧湧けり
見馴れたる港消したる朝の霧
潮風の旨味のせくる秋の鯖
漁火の横一文字秋の暮

☆ ☆

季音月

湯揉み唄

丸山 マスミ

秋鯖の背に越前の海光る
街騒を隔つひとり居秋簾
下京や昼を灯して秋簾
初任地はかつて流刑地雁渡し
椽の実や低く洩れくる湯揉み唄

鳴かぬ蝗

藤澤 喜久

刈り急ぐ先へ撥ね跳ぶ蝗かな
減反や鳴かぬ蝗の草に跳ぶ
刈田面農夫佇み詩人めく
吾亦紅主役に勝る脇役ぞ
秋さみし昨日と同じ部屋にゐて

香気放つ

柚木 治子

急流に任せ無心の下り鮎
落鮎の命まるごと戴きぬ
香気放つ粹な脇役菊なます
四十十川に余生あづけて鮎下る
灯火親し考へあぐむ助詞一字

秋の夜

高島 寛治

てのひらに重き干柿陽の重み
秋の蚊の流されがちに飛びにけり
秋の夜の推理小説下巻へと
草の実を纏ふ迷子の子猫抱く
幼児もいなせな法被秋祭

秋色

渡辺 舎人

運動会押^{おっす}忍^す押忍と応援団
百草の花愛ぐし憎しの花言葉
ゆふがほや垣に絡まるさびしをり
ポケットに甘栗菊花賞の馬券
浄瑠璃の人形に落涙秋の夜半

栗

鳥羽和風

長靴が産婆に変わり栗産まる
栗落ちて地べたこつんとノックする
艶やかな里の光や栗届く
大栗に洪の逃げたる洪皮煮
家の米家の栗なり家の味

枯蟪螂

森田祥絵

佇めばすぐ発つ鳥や葎の花
バツタにも子等にも原つぱありし頃
秋思ふと病院のロビーコンサート
余生さらりとむかご飯を山盛りに
倒木に枯蟪螂の瞑想中

異人館

田寺玲子

少年の声よく透る鯨日和
海峡を見下ろす駅舎小鳥来る
小鳥来る鎧戸多き異人館
秋ともし目つむりて聴くシューベルト
颯雲波をけたたててランチ着く

桜の戦士

森本早苗

勇猛な桜の戦士新走
蓑虫の終生の夢大車輪
城を背に火入れの儀式秋の能
永別の面影しのぶ夜半の秋
弱り目のからだに効き目とろろ汁

藪の信号

松本光子

疎遠なる人なつかしき菊膾
晚鐘を聞きつ厨に菊膾
石榴割れ夕日に染り子牛生る
踏み入れば藪の信号烏瓜
橋と坂多き東京初しぐれ

露寒し

井上燈女

掘り立ての里芋届く土湿めり
立入禁止の縄の緊張茸山
板一枚敷きて路傍のしめぢ売り
病み疲れたる中にゐて露寒し
青淵の論語に触るる秋燈下

雄 鶏 町野 広子

残暑なほ雄鶏胸を反らせをり
夫婦別姓雌雄別株秋の雨
浜焼きの秋鯖を抜く串一本
園児らのトコトコてくと萩の風
桔梗や嘗てここには家畜小屋

石 露 の 花 霜 中 冬 至

一族の合同法要石露の花
血圧を計る習慣石露散れり
もの言はぬ能面に逢ふ秋思かな
大きくさめあとあぢのよき具合かな
竹串の鯛にありつき秋思かな

綿 虫 池 田 雅 夫

ほろほろと十一月の撫林
初冬の爪を切る音弾けたり
冬耕の妻は夕餉の仕度へと
地に足の着かぬ軽さや落葉径
綿虫の行方を追へば我が在所

命 綱 川 崎 道 子

木犀やトランペットを磨き抜く
町名に下級武士の名賜日和
秋祭枝の神鶏眠られず
大漁旗振つて応援雲
蓑虫やガラスビル拭く命綱

末 の 秋 井 関 礼 子

穂芒に匿はれ行く柚の途
芒野や丹波路肅と札所寺
遊び田に栗の弾けし道すがら
蓑虫の揺れて住み処の定まらず
身辺りも少子化の波小鳥来る

冬 晴 れ 川 野 妙 子

冬晴れや祝賀パレード生まれり
人波のゆれて祝賀の冬の空
日本は神の国なり冬紅葉
デザートプリンするりと冬紅葉
とびこみし食堂の窓冬紅葉

蓑虫 十倉和子

蓑虫の漂泊はじまる空の青
蓑虫になりたや気まかせ風まかせ
蓑虫の惰眠覚ますや魚鼓打つて
落柿舎の蓑を親かと鬼の子は
自動ピアノの椅子にすつくと子かまきり

巾着田 加藤むら子

曼珠沙華 空気も朱色巾着田
蒼天やどこまで続く曼珠沙華
曼珠沙華 川音 囃し咲き誇る
年毎に広がり見する曼珠沙華
曼珠沙華 アーチ橋より対応す

戦歌 荒井俱子

新米や黄身が二つの赤玉子
新米や少し古びし夫婦箸
木の実落つ鏝の目立ちしトタン屋根
数珠玉や母とうたひし戦歌
根野菜ほつこりと煮て秋惜しむ

秋の声 内田恵子

切株にはじまる石化秋の声
どぶろくを腰に吊して柚の道
廃村の墓標は萩の脇道に
やや寒や雑草の根の踏張つて
鴟日和びんぴん尖る樹樹の影

曼珠沙華 岡野順子

それぞれの意志が一花に曼珠沙華
ぬつと出て頬寄せ合ひて曼珠沙華
帰り道一つ二つと橡の実よ
担任の先生と行くみかん狩
一番手二番手の草暮の秋

☆ ☆

季音花

茸 狩

故 加 藤 草 太 郎

到 来 の 松 茸 に 妻 憂 ひ 顔
 茸 売 り の 幟 を さ が す 茸 狩
 街 の 灯 の 消 え て 始 ま る 虫 時 雨
 鳴 く 虫 に 闇 の 深 さ を 計 り け り
 寄 り 合 ひ は 棚 田 の 畔 で 秋 の 昼

秋 惜 し む

梅 澤 佐 江

色 鳥 や 君 と の 夢 の 設 計 図
 露 寒 や 珈 琲 香 り 立 つ 朝
 神 苑 に 菊 の 白 妙 巫 女 溜 り
 端 正 に 生 く る は 難 し レ モ ン の 香
 新 聞 小 説 「 了 」 と な り た り 秋 惜 し む

妻 の 秋

原 田 想 子

挽 ぎ 手 な し 屋 根 低 う し て 柿 明 り
 栗 の 飯 ほ く ほ く 病 癒 え に け り
 柏 手 の き れ い に 二 つ 妻 の 秋
 美 し く 土 も ち 上 げ て 茗 荷 の 子
 地 の 神 に 残 す 一 本 大 根 畑

草 の 実

松 井 由 紀 子

草 の 実 や 野 の 子 が ひ ら く 手 の 匂 ひ
 野 仏 へ 草 の 実 も あ る 手 向 け 花
 草 の 実 を 付 け て 仔 猫 の 啼 い て く る
 栗 の 皮 剥 く 災 害 の 記 事 の 上
 秋 の 日 を 父 に 付 添 ふ 名 刀 展

菊 月

森 川 義 子

菊 月 や 永 字 八 法 説 き 論 す
 会 釈 せ し 巫 女 の 黒 髪 菊 薫 る
 イ ベ ン ト の 国 旗 が 招 く 秋 の 昼
 焼 印 の 押 さ れ し 校 具 秋 の 暮
 秋 の 暮 今 日 締 め 括 る ひ と り 酒

衣被 野口和子

轟音に変はる川音台風圏
マネキンの美人すぎたる案山子かな
真ん中を凹ます団子秋供養
猿座る橋の欄干野分あと
初採りの大ぶり小ぶり衣被

秋思 田中千穂

小面の秋思のはての般若かな
爽やかや湖にゆるぎなき逆さ森
引潮に片貝現るる秋思かな
命綱たぐり寄せつつ松手入
山芋を嬰のごとくに包み抱く

草の実 大場順子

草の実をつけ合ふ子等や日の匂ひ
この道を行けば故郷草の実飛ぶ
両岸の燃えて迫り来紅葉舟
欽持つ手笛に持ち替へ秋祭
風音は木の葉時雨よ森の音

村芝居 上戸千津子

台風のうねりに揺らぐあきつしま
村芝居肝煎衆の見せ所
式部の実雅な絵巻彷彿と
蓑虫の舞姫の夢風誘ふ
棗の実落ちるが儘に千年家

実り 井口俊晴

売り出しに新米添へて景氣づけ
冷まじや杉の梢に星ひとつ
草木の闇を絞りて虫の声
夕日差す臨書の窓辺新松子
毬栗の地雷を避ける犬の鼻

初秋 井上玲子

廃校に佇ちて幻聴草紅葉
湖にどつとなだるる照紅葉
木霊棲む切株にかけそぞろ寒
庭師去り暮色の中に秋の声
稲雀われの一步に颯と散る

京丹後

矢島

清

京丹後葉裏に揺れて木の実落つ
脇宮は長寿の神よ障子貼る
結界の奥のおくなる草虱
キャンパスの空は透明銀杏の実
天高し庭師の鋏迷ひなし

月

山田 美佐尾

病院の窓より月のみな無口
檸檬掌に瓜実顔のお姫様
神木を撫でてパワーを秋の暮
駅構内の物産店や秋の暮
学僧の漬ける大樽秋の暮

秋の実

野平 美紗子

銀杏を炒れば古里匂ひだす
烏瓜ぶらりぶらりと瓜坊似
かけがへのなき青空やコスモス野
掘りたての芋の夕餉となりにけり
秋の霜介護職なる子の早出

穴太積み

福田 千春

冷まじや今も堅固な穴太積み
俯瞰する街に青色冷まじき
待ち人よノックは二回菊枕
妻の留守椋は一樹に群れてをり
まだ先の見えぬ秋思のをとこ坂

桔梗

菅原 知子

きちかうやわが家は五人小市民
帯ボンと母の仕上げや白桔梗
半月ぶりの妻の御帰還冷まじく
秋思ふと杖の行き先右に向く
秋思かな五能線から日本海

婚の鐘

後藤 綾子

秋深し林中響く婚の鐘
秋落暉浅間嶺ゆらぐ薄けむり
讚美歌洩るる門扉の隙間蔦紅葉
告げたき事あるかにめじろひよいと来る
少年の小さき墓標草紅葉

秋の雲 中野 疆

公園の看板囲む秋の草
合戦祭り幟連なり秋の雲
天竺へみんな乗りたき秋の雲
庭柿を父の姿勢で眺めけり
秋の夜の白紙のままの終活帳

秋 果 宮崎 雅訓

御裾分け新聞紙から梨あらは
禁酒して柿を堪能してをりぬ
つれづれに客間へ林檎通しけり
葡萄食む味粒数も限りなし
無花果のうがひ朝風含みけり

紫苑 松山 清子

紫苑咲く紙飛行機は風を呼ぶ
紫苑揺れ九九の暗誦ひとしきり
雨冷の一日断捨離励みたる
ビルに添ひまつすくな木の榎櫃の実
クレインの林立の町鳥渡る

伴 走 秋山 冷子

伴走はまかせておけと秋茜
道草の好きな家系よ草の花
いぼむしり役者貌して出番待つ
さよならはまたねの合図秋の蛇
医師に脈預ける安堵合歡の花

花 芒 西浦 千枝子

東屋の先客は猫萩の花
ふる里は様変りして鱒雲
トンネル四つ抜ければ明日香紫苑咲く
此の先は幅員減少花芒
豪邸と遺跡の続く秋桜

唐辛子 鈴木 木みや

待つ子等に足を崩して栗をむく
唐辛子色艶ほめて苦手なり
古稀すぎてちやん付けで呼ぶ芒原
久しぶり二人揃ひて月の客
コスモスや心ゆるめる色に咲く

俳誌望見

梅澤 佐江

『対岸』 令和元年九月号 通卷三九七号

主宰 今瀬剛一 発行所 茨城県城里町

昭和六一年九月、今瀬剛一が茨城で創刊。師系能村登四郎。「自分の感動を自分の言葉で表現する詩的な作風をめざす」を理念とする。(月刊)。

本号は「全国大会特集号」として六月二二日(土)〜二三日(日)の二日間に亘り、小山グランドホテルで開催された第三一回全国大会の模様を山中明子・山口はる江の両氏で記している。当日参加者一〇六名。

一日目に「濱田庄司益子参考館」「陶芸メツセ益子」主宰の第三句碑のある「天平の丘公園」「国分寺跡」を吟行の後ホテルに戻り、第一句会。

主宰作品

十葉に陶の艶あり益子町
緑雨なり句碑に従ふ石二十
登り窯なり夏山へ這ふ形

特選句

那須岳の風よく通り夏座敷
句碑もまた年を重ねて夏木立
秀逸句 力作二一句より三句紹介

梅雨晴や赤絵の皿に鯉泳ぎ
流し掛けの線の勢ひ半夏生
芝青し浮かぶが如き礎石なり
二日目の午前八時より第二句会。

橋本 公子
石川 定子
塚口恵美子
杉岡ふみ子
成井 侃

主宰作品

句碑涼し去りて戻らぬ顔いくつ
登り窯ころがつてくる蜩蝶
藍句ふ中に家あり花ざくろ

特選句

青嶺より雲湧き起り陶の町
師の句碑も万葉句碑も緑さす
秀逸句 力作二二句より三句紹介

みな去りて句碑はひとりに銀河濃し
麦秋の中にコンバインひと休み
皿一枚大切に抱き梅雨の町

主宰選評「全体的にレペルは高いが気を付けたい事として
気張り過ぎないこと、気張り過ぎての漢字の多用は心に響か
ない。やわらかな和語での表現の中にこそ本音はあり読み手
に伝えられる」と述べている。

主宰作品「百物語」二〇句より三句紹介

無為に老いけり泉には真顔見せ
我死なばかの羅の母消ゆる
百物語壁の白さに囲まれし

一句目、自身への深い洞察と諧謔、二句目、決して消える
こと無い母への憧憬。三句目、一話ごとに一〇〇本の灯心が
一つずつ消えてゆく時、壁の白さが妖気を際立たせ独得の世
界観に圧倒された。

通常作品は「晴天集」四一名、「高音集」一三一名、「対岸集」
二二二名、計三九四名の投句からなる。

主宰選による「明窓十句」「さきがけ30」主宰の連載「能
村登四郎ノート(二一三)」、青天集 岡崎桂子氏の「今瀬
剛一の世界(四五)」高音集 池内雅一氏の「平成俳句論考」、
井之口貢久氏の「結社誌を訪ねて」、「同人句会探訪」等濃厚
な内容で、結社「対岸」の真摯な姿に最後の一頁まで読み込
みがあり、有意義に勉強させて頂いた。

小林恵美子
長谷川宏子

松本 淳子
岩上恵美子
石川 定子

現代俳句鑑賞

網野月を

背中とは美しきもの踊の輪

伊藤 政美

〔俳句四季〕十月号・巻頭句より

体の部位を言いながら中七「美しきもの」のように表現をすることは表現の世界には既に存在するだろう。ただその時空間が座五の季語「踊の輪」で設定されているのである。掲句のような上五中七の座五に季語を置く場合に、時候や天文ならば、または動物や植物ならば、ただ体の部位とその部位への作者の把握のみで終止してしまつて、報告になつてしまふのだ。が掲句は動作の意味を含有する季語を配して、体の部位が「踊り」という動作を演じていることに着目している。その事によつて「背中」という部位への作者の把握のみという域から一步、二歩踏み込んだ、作者の懐述になつてきているのである。中七の切れが時空間の設定を即物的に納めずに、微妙な距離感を持たせている。

縄文の色は赤銅夏椿

夏目 重美

〔俳句四季〕十月号・四季吟詠・鈴木しげを選より

中七の「は」の断定が心地よい。加えて「赤銅」は少なくとも読み手が納得する色合いである。掲句は、その加減が絶妙なのである。句における断定は個人的なものに陥り過ぎる

と、無論共感を得ることが出来ないが、そういうえばそうだなあ!くらいのところで詠み切るのが良いのだろうと筆者は考へる。座五に置いた季語「夏椿」の斡旋は作者の若さを物語つていゝ。

秋風の眠れる本を買い戻る

行川 行人

〔俳句界〕十月号・新作巻頭3句より

古本屋の本を買い求めて来たのかなあ?と解釈した。もしくは本屋でなかなか売れない本、例えば何科かの専門書や俳句ならばお堅い研究書かなにかであろうか?中七の「眠れる」の表現について、そう連想したのである。上五の季語「秋風」は作者へも吹いているし、買った「本」にも吹いている。作者の感じている「秋風」は、文字通り読書の秋に通じるであろうし、「本」を取り巻く「秋風」は眠りを覚まされたことに通じているように読んだ。

言葉にはいつも穴あり秋灯

柳田 寛

〔俳句界〕十月号・蛭蚓鳴くより

上五の「言葉」とその中に存在する「穴」の意外性と、言われて見れば存在しているのかも知れないと思わせる句の意味がこの句を成立させている。中七の「いつも」が読み手に

伝える必然性がそうさせているのだ。中七の「…あり」の後の切れが座五の「秋灯」を導き出している。他に「木の葉散るなにごともなき日なれども」がある。思考の過程が幾重にも重なりあっている、アイデンティティの強い句になっている。

羊皮紙の陰翳のやう昼寝覚

〔俳句〕十月号・尖塔より

佐怒賀正美

令和元年度の現代俳句協会賞を受賞した作家である。受賞句集となった『無二』は既に一月号に取り上げている。把握見立て、比喩などどれをとってもその独自性と、句中のアイテム同士の連繋性における四次元的組み立て方法は、現在活躍する俳人の中で随一である。掲句は「尖塔」の中では比較的解り易い句になっているが、一般には普通、座五の季語「昼寝覚」への飛躍は、上五中七の措辞からは滅多に飛び上れない領域であろう。他に「さらさらの蛇の心を通せんぼ」「砂州消えて尖塔に星流れけり」などがある。

ちちははを西日の部屋に置いてきし

〔俳句〕十月号・西日より

齋藤朝比古

中七の「西日の部屋に」は少々過酷な感じがするのだが、上五の「ちちはは」がどのような状態でいらつしゃるのかが分らないので、読み手の想像に任されている部分であろう。ご健在でいらつしゃるのか、ご遺影になられているのか。もしかしたら「ちちはは」への作者の思いを「西日」の当たる「部屋」で回顧し、そのままにその部屋を後にした、と「置いてきし」を読むことの可能性もあるかも知れない。

ジェット機の尻の裸身のひと廻り

〔俳壇〕十月号・茨城空港より

秋尾 敏

視る力の確かさが掲句のような句を生み出すのである。難解な表現も無く、理解しやすい。見る対象物への把握が、眼力に担保されている。

クリムトもシーレも世紀末の汗疹^{あせも}

〔俳壇〕十月号・牧より

宮坂 静生

ハイデルベルク、ニュルンベルク、ザルツブルクを経て多分、ウィーンまでいらしたのである。ベルヴェデーレ宮上宮の美術館で、「接吻」や「死と乙女」をご覧になったのである。ウィーンはアール・ヌーボーで満ち満ちている街なのであって、ウィーンの中にあつては、傑作も「汗疹」くらいにはしか見えないのであろうが、それでも座五の季語「汗疹」は凄絶である。

永き日や見知らぬ我のゐる写真

〔豈〕62号・物やればより

干場 達矢

過去と記憶は異なるもので、同じく想像と未来も、今日と現実も異なっている。ズレがあるくらい的事なら句にはならないのである、全くの裏返しであったり、異空間のものであつたりすることで、文学になり得るのである。俳句の多くは現実を描くものであるが、作者の句を読んでいると実存と人間的思考における存在の差異が見えてくるのである。このような句柄の作家は珍しい。俳句の新領域を開拓する可能性を探っているのだらう。他に「春の宵死んだ女優の映画見」彫刻に掌の記憶あり夏の雨」がある。

金の鈴銀の鈴

◆季音十月

町野広子

秋桜風の量ほど揺れてをり

山中 順子

秋の代表とも言える秋桜の花。背が高くなり強風では間違
いなく倒れてしまうが、掲句のそれは微風にそよいでいる。
秋桜の文字も美しく、何とも言えぬ愛しさが募る。「風の量
ほど」とは言えそうで言えない。秋桜の習性や臨場感が確と
表現されていて、正に秋桜のように優しい御句である。

阿波踊りーダーときにバリエーション

小林萬二郎

「踊る阿呆に見る阿呆……」三味線・笛・鉦・太鼓等の囃
子に合せ列をなして踊り回る。日本を代表する祭りであり実
際に見た事はなくとも誰もが知っている踊りであろう。特に
男踊は腰を低く足捌も軽やかに、人々の笑いと称賛を浴びて、
リーダーは更にあの手この手で盛り上げ連の一体感を保つ。

ケルン積む男に傾ぐ稚児車

五明 昇

六根を浄めて泊る登山小屋

石を積み塚とするのであるが、鎮魂の意又は連続して境界
線にもなる。高山植物の稚児車が可愛く優しく「男に傾ぐ」

が泣かせる。二句目六根(目・耳・鼻・舌・身・意)を浄め
ての山参り。堅い決意の感謝・祈りが届きますように。
山に係る男つばい、二句に羨望を覚える。

川の字の真中の吾子を寝冷えさす
妻に手を引かれて入る踊りの輪

境 延昭

二枚の布団を並べたものの掛布団は親がそれぞれに纏って
しまったので、真中に寝る子供が寝冷えしてしまった。若い
家族の幸せな様子が見える。二句目尻込みする夫を強引に、
踊りの輪に引き込む陽気な妻。入ってしまえば見様見真似で
身体が動く。心地良い疲れで帰路には話が盛り上る。

桔梗の蕾解かれて姉逝きぬ
百日紅弱視の姉の小抽斗

島津 初花

秋の七草の一つの桔梗。花は五片の青紫で美しい。気高く
も楚楚とした美しさ。正に日本女性好みの花かと思う。ふっ
くらとした蕾が解かれ日に大切なお姉様を亡くされた。二句
目いつも側にあつたお姉様の小抽斗には、日常の思い出深い
品々が遺されており、新たな涙を誘う。

二句共に深い悲しみが静かに詠まれている。

母のミシン眠る物置き日の盛り
街中の人と人の間秋立てり

永野 史代

古い足踏みミシン。子供達の服を作ってくれていた妣の姿を想い出す。使う人も居らず、しかし処分するには忍びなく今は物置の中。静と季語の動の対比が面白い。二句目今日は立秋。すぐに涼しい訳ではないが、街の人々にそれを感じた。何も難しい事は言わずに、それを感じさせている。

石を積むだけの首塚黒揚羽

田寺 玲子

処刑された罪人等の首を埋葬した墓で、今ではその存在さえも忘れられたり、知らない人が多い。掲句の塚も只、石が積まれているだけの物で気付かずに居るかも知れない。権力者が世を動かしていた時代の、無念の死も多かつたに違いない。名前さえ残らない人々の眠る塚辺りを哀悼のごと舞う黒揚羽。周辺の薄暗さも感じられる。

八月や焦げし記憶の甦る

伊藤 敦子

昭和二十年八月六日広島、九日長崎に投下された原子爆弾同年八月十四日ポツダム宣言を受諾後、無条件降伏書に調印し終戦となる。八月とは焦げた記憶と詠む作者にとつては、どのような八月であったのか。戦後生まれの筆者には想像に難いが、日本中が火中であり、苦難を強いられていた事に間違ひなく、決して忘れてはならない事実である。端的な言葉で心から訴えられ伝えられた一句である。

秋めきて無尽蔵なる鳥羽の溪

霜中 冬至

水明の故郷である若狭。その地に生まれ暮らし、そして何よりも故郷を愛する人々が居る。作者もその一人。秋には澄んだ空、空気、水、山、田畑、どれを取っても自慢の出来る物ばかり。その前に、人が好い事は第一に挙げられる。都会の様に華やかさ便利さは無いが何度も行きたくなる。正に無尽蔵の地なのである。

絶筆の友の玉章白桔梗

森川 義子

これ程急に逝ってしまうとは思わなかった友の死に直面する。最後の手紙となった達筆且つ立派な文章。闊達で常に自分を見失わず、清廉な方であつたらうと想像する。白桔梗が深い哀悼を表す。

帰省子の時に大人に幼なにも

野口 和子

充分に共感出来る一句。親元を離れ初めての帰省か。久に会う子の成長を見て喜び、又時には親にだけ見せる甘えもありそれも嬉しい。身辺を詠まれた楽しい御句である。

仏前に銘柄指定の缶ビール

井口 俊晴

ご供養の御句にも係らず何故かホット笑みが零れる。仏様となられた方は、大のビール好き。しかも決った銘柄を好んでいた。故人を良く知る家族や友人からの供物である。誰からも愛された方に違ひない。

俳句と私



大村 節代

近くの公民館で「油絵入門講座」が開かれたのは、三十年以上も前である。その講座で「水明」の素晴らしい表紙絵を描かれている内田恵子さんにお会いした。それから何か面白そうなイベントがあると知らせあつて楽しんでいた。

そんなある日、恵子さんから電話があつた。「岸町公民館の西句会で、お茶汲みと机並べを頼まれて今月行つたのよ。来月はあなたもお願い……。」ええ、句会！俳句！冗談ですよ、無理よとお断りしようと思つた。けれども今のようによいレビで、プレバトやらNHK俳句やら、放映していない時代だったので、句会とはどの様に進めるのか、一回だけ覗いて見たいと思つた。そこで、五・七・五よねと分らないままに、言われた通り七句作つて伺つた。

西句会は、水明の佐々木久代先生が指導されていた。私の一句に特選を下さつた先生は「節代さん、この特選の句は初めてにしてはとても良い句です。でもこの三句は詠み込みと言つて季語を入れなくてはいけません。来月は季語を入れて詠んで下さい。待っています。」とおっしゃる。傍らの方も

「若い奥さん（当時は私も若かつたのです）にいられて頂いたお茶は美味ですなあ。ありがとう。」お二人に期待？されてしまつては、一回だけでは申し訳ない、来月もう一回伺わなくてはと思つた。もう一回、もう一回が重なつて、何と三十二年も俳句にとっぷり浸つてしまつては、我ながら驚いてゐる。しかし、久代先生にほめて頂いた最初の句は「ままごと……」だつたと思うが、申し訳ないが、思い出せない。

安易な切つ掛けで始めた俳句なので、皆様とのおしゃべりが第一で、俳句は二の次、水明への投句も二〜三年経つてからやつと始めた。そして本に載っている人は、特別な人だと思つてゐた。

やがて、柿の木塾、珊瑚の会、第一例会と句会の数も増え、行事部を経て、編集部のお手伝をするようになった。それでも、相変らず、皆様と仲良くして頂いて、楽しく過ごしてゐた。そして、何年も水明集でここにこぶらぶら……。

そんな折、紗一先生が私の句を「今月の秀句」に選んで下さつた。この頁は遥か見上げる方々が毎月飾つていて、私如

き者には、縁がないと思っていたので、正に青天の霹靂。

主宰の選ばれた一句と解説が載る「秀句鑑賞」の頁は、紗一主宰が亡くなられて平成十八年一月号から星野光二主宰に引き継がれた。そして平成二十年一月号から、現在の「歴代主宰の一句」の頁になった。尚、その間、光二主宰に三回選んで頂いた。私の下手な自句自解よりも、紗一・光二両主宰が選んで下さった四句の素晴らしい解説を皆様にお読み頂きたく、転載させて頂いた。

この度のかな女賞、亡き先生方、亡き句友の皆様ありがとうございます。ありがとうございました。鬼之介主宰、順子先生、句友の皆様、ありがとうございます。これからも宜しくお願い致します。

南瓜切る俎板きゆん・悲鳴あげ

第八八一号（平成十六年一月号）

擬音語・擬態語の活用をすすめているが、一句を左右するような見事な擬音語表現である。単に南瓜と言っているが、冬瓜南瓜に近い固い実であると思う。南瓜ではなくて、俎板の方が悲鳴をあげているのである。「きゆん」という音はするどい季節感ともなっている。

（紗一註）

風船の弾けて空気鷲掴み

第九二二号（平成十九年六月号）

空中に浮かぶ風船には夢がある。あのパンパンに張ったゴ

ム風船の表面は、浮くために中に入れた水素と押しつぶそうとする空気の闘ぎ合いの場である。風船が弾けた瞬間、ゴムは縮まり、これを空気が「鷲掴み」したとは面白い表現、弾けて果敢無い風船であるが、大いに夢を与えてくれた。

（光二註）

夕焼雲死の順番が入れ替る

第九二五号（平成十九年九月号）

夕焼は、日没後日光が空中を昼間より長い距離を通ってくするため、光の散乱によって起る現象である。西空の何でもないう雲という雲が、日没後赤色や黄色に染まり見事な美しさを描く。作者は、この雲が生き返ったような夕焼を見て興奮した。作者の見た情景が詩的にまで昇華された句である。

（光二註）

鍵束の合鍵棄てる竹の秋

第九三四号（平成二十年六月号）

この作者はときどき人を驚かせる句を作る。この句も読者にいろいろと想像を逞しくさせる句である。合鍵の語感からくる連想は、共同で利用するため、一緒に暮らすため、仕事上のため、愛人のためなどに合鍵を持つことが考えられる。棄てるには要らなくなったのか、何かの理由から分らない。人間はふと呪縛から逃れたくこういうことを考えることがあるかも知れない深層心理の世界のようだ。

（光二註）

自選五十句

大村 節代

御代の春人類愛を説く輩
飛び石を三つ越えれば黄水仙
騙し絵のやうな青空白木蓮
人にイヤリング牛には耳票猫柳
黄水仙みな短足の岬馬
風船の弾けて空気鷺掴み
九九の声乗せてふらここ高々と
菜種梅雨ゆるりと溶ける和三盆
春の宵レコード針の甦る
藪椿今に重なる江戸古地囃
苗札を挿せば大地の臍と化す

いつ青春いまが青春リラの花
鍵束の合鍵棄てる竹の秋
木下闇水晶体は厚さ増す
修復の土偶に乳房百合匂ふ
少年に男の匂ひ夏兆す
緋緘の鎧のやうに金魚の斑
夕焼雲死の順番が入れ替る
大木を楢円に包む蟬時雨
油照り家畜は毛皮ぬぎたがる
丸太から仏誕生汗光る
光源氏の襲かさねの色に茄子の花
父も子も大器晩成ところてん
男衆の素うどん搔つ込む夏座敷

南瓜切る組板きゆんと悲鳴あげ
甘くても甘くなくても青みかん
返り花折れたクレヨン紙で巻く
花野にて少年の目取り戻す
ぞつき屋の法螺を樂しむ秋日和
まだ尺で数ふる角材落葉中
小面が鬼女に見える日秋暑し
秘め事の一つや二つみみず鳴く
貴重品のピアフのレコード秋の月
危絵に小さき裏張り秋燈下
流星やカフカの虫になりさうな
石鹼のふやけたる夜や秋深む
絨緞の花に呑まれたイヤリング

一晩でどろんと消える酉の市
叩いても無言のラジオ冬の朝
冬木の芽イコンのやうな男来る
人も木も屈葬の形寒に入る
大寒や人体模型になる心地
甦る鉄腕アトム冬夕焼
句碑の雨払ふは狐か冬桜
風花にはらりと解けた片結び
腰で持つ寸銅の鍋寒の朝
ぞつき本の中に珍品寒明ける
余寒なほ畏れて開く和閉ぢ本
反戦へ迷はず署名北吹く日
山眠る人間にふと怠け癖

黄水仙

山中 順子

飛び石を三つ越えれば黄水仙

三つの飛石の意味を考えると、その石の間に何があったのか探りたくなる。三つとはきつと難しい事でもあったのか越えれば春の花黄水仙が待っていてくれた。うまく着地出来たそこに見事「かな女賞」受賞である。

節代さんと初めて親しくなったのは、平成六年に行事部見習（不思議な辞令）として入ってきてからである。

その頃行事部長吉田静二氏の下、若い女性陣が行事を盛り立て又私もまだ何も分らず夢中で部長の計画に従い動いていた頃が懐かしく思い出される。その後四年位で節代さんは編集部に引き抜かれ少し間が開いてしまった。

黄水仙みな短足の岬馬

風船の弾けて空気鷲掴み
九九の声乗せてふらここ高々と
春の宵レコード針の甦る

少女つぼさの抜けない節代さんの四句。さわるとふわっと和らい手ざわりが伝ってくるのが印象深く感じていた。そして平成10年から現在まで編集の要となり活躍している。でも部は別だが何かと合うチャンスがあるので別に離れていつてしまった感はなかった。増して行事部のピンチの時は何かと助けて頂いている。家が発行所に近いので早朝の会の時は特に助かる。本当に感謝の念には深いものがある。又明世先生の跡を私が継いで珊瑚の会を指導しているが、今水明に於いて活躍出来る会には無いと思う。その会の幹事として会を束ねながら大会の準備から開会、受付と会員をそれとなく動かしている力は私にとって無言の親しみと信頼を抱かせられている現状である。本当に長い年月に培った節代さんと私の間には誰も入れない何かを感じるこの頃である。私もこの歳になると少しは弱くもなるのでそんな時にも必ず電話を頂き心配してくれる可愛い妹のような存在でもある。礼をいう。

さて節代さんの編集に対する熱心さは誰もが認めている、その力を發揮して第15、16水明抄の編集長を見事務め上げ読

み応えのある一冊になった。

その第16水明抄から

花は葉に神保町にて初版本
誤字脱字多き会報心太
余寒なほ畏れて開く和閉ぢ本

節代さんが日頃文字を相手に奮闘している姿が伺えてくるが、俳句にすると和みが出てハーモニーを奏でているようにも思え、むしろ楽しんでいようだ。作者の文字に対する敏感さを感じた。

今年の夏行の中から

黒光りする足踏みミシンががんば来

今はポータブルになり電動であるのに手入れされた足踏みミシンとががんばの取り合せが生み出す音が冷静でありつつも心地よい気分させてくれる。自分の足と虫の脚の調和は隠れているが巧みな句に仕上がっている。

そして地に輝いた一句。

笑ひ絵にががんぼ足を置き忘る

この句は主宰の夏行講評を拝読すれば納得出来る。席題で笑ひ絵が出て来る懐に深く揺さ振られる。最近の句の中に、

訃報あり今宵は月と般若湯

この秋は友の訃報が多かったが節代さんも最愛のご主人を何年前かに亡くしている。私もそうであるが「あり」と一見冷めたく離しているが胸に受け取る覚悟は並ではない。月に問い聖人に甘えての一献に永別の時を過ごしている。

夕焼や死の順番が入れ替る

夕焼けは毎日順番よくやってくるが、死の順番はそうはいかない。こんなつらい句が出来る節代さんの生きぬく表白の句である。ここに「かな女賞」に輝いた節代さんこれからも編集及び水明の指導者として明るく元気でいて欲しい。

おめでとくと両手を挙げてお祝したい。

ずうーと青春

星野 和葉

ねぶの花土偶の腰の豊かなる
ねぶの花老女も時に伊達眼鏡
地唄舞の黒子の走る夜の秋
笑ひ絵にががんぼ足を置き忘る
黒光りする足踏みミシンががんぼ来

掲句は、今年七月の夏行で作られた句である。皆勤の三日間、一時間に席題で三句、その内より主宰の特選を射止めた句である。ふっと句が出てくる事もあるが、なかなか出来ずいらいらの一時間という事もある。そんな中、掲句の様なすばらしい句を次々に詠まれた。

合歡の木は、対生する葉が羽状に細かく分かれ、夕方に閉じて眠ったように見えるので「ねむ」の名がある。これと反対に、極細の糸房のような花は夕方開く。けぶるように咲く花は、月夜であったなら幻想的な景になるだろう。そこで土偶が見えてくる。伊達眼鏡は一寸した閃きであろうが、老女

を持つてくるところが作者の真骨頂だ。「夜の秋」に地唄舞の黒子を走らせたり、「ががんぼ」の足を笑い絵に置いたり、今ではあまり見られなくなった足踏みミシンを出してきたり筆者からすれば突飛な？言葉を次から次へと登場させる。それが疑うことなく納得の一句となる。要するに語彙が豊富なのである。

節代さんとの出会いは、平成の初めに筆者が「柿の木塾」に入った時である。その後、節代さんが腕を買われて編集部に來られて以来の持たれつ持たれつ付合いである。

節代さんは独身の頃、ある会社の広報部に属し、広報誌作りに携わっていたとの事、結婚後も小さな会社の編集部、子供さんから手が離れてからは、塾の雑誌の編集、地図出版の編集など、ずっと編集に関わっていらしたそうだ。それ故、水明誌の割付けなど何でもない事なのである。自信を持って編集をし皆様にお届けしているのである。

遊糸なか騙し絵めきし滑走路

騙し絵のやうな青空白木蓮

危絵に小さき裏張り秋灯下

騙し絵は、目の錯覚を利用し、見方により、さまざまな絵柄に見える様に描いた絵で、確り見えていても騙されてしまう楽しい絵である。滑走路の飛行機、青空の雲、そして危絵に裏張りなど意味深な言葉が使われる。絵画展にも良く行かれ

る様なので、句材が豊かである。

枇杷の花ごつごつと塗る岩絵具
春浅し似ても似つかぬ肖像画
冬ぬくしまだらに滲む石版画
広き田に白鷺配し点描画

此処二、三年の水明誌から拾ってみた。節代さんは絵画も習っていらしたと聞く。「抽象画だから馴染がないかも」と謙遜なさる。絵を始めた時のことが大分奮っている。息子さんが小学生の時に習い始めて続かず止めてしまった時、先生の収入減となる事を心配し、それなら私がと始めたそうだと心根の優しい節代さんである。

冬木の芽イコンのやうな男来る
群像の一人足りない春の宵

この二句も絵画を堪能している方の句である。「イコン」は、ギリシャ正教会でまつるキリスト・聖母・聖徒・殉教者などの画像である。その画像に似た男が向こうから来る、咄嗟にイコン。どんな顔をしているのだろうか。次の句も群像の中の一人が足りないという有り得ない事を言い切ってしまうのが節代さんの俳句である。

一葉か漱石読もか葉種梅雨

流星やカフカの虫になりさうな
春の宵レコード針の甦る
貴重品のピアフのレコード秋の月

若い頃からの職業柄、読書も相当なものだろう。「カフカ」はプラハ生れのドイツ語による小説家。作品に「変身」「審判」「アメリカ」などあり、すべて読んでしまったのであろうか。「ピアフ」はフランスの女性シャンソン歌手、「バラ色の人生」「愛の賛歌」などを作詞。今では貴重品となってしまったレコードを聞きながら月の夜を楽しむ。なかなか多趣味である。

いつ青春いまが青春リラの花
少年に男の匂ひ夏兆す
父も子も大器晩成とこゝろてん

今まだ青春とはうらやましい。以前節代さんが話してくれた事がある。結婚する時にご主人と「お互いに友達感覚でいようね」と約束したらいい。そう言えば話の端々にそんな気がしなくもなかった。だからずうーと青春なのである。

「この年になって編集・校正の仕事は大変な事なのよ」と過去を振り返って言いつつ、眼科、接骨院のお世話になりながら、お互い労りあつての水明誌作りなのである。でも、節代さんにもう少し頑張つて戴かないと……。
心より かな女賞おめでとうございます。

大村節代の 一句



ゆらゆらと海月に継目見あたらぬ

私が掲句に出会ったのは、俳句を始めて未だほんの三、四年、先の主宰紗一先生の選による水明抄巻頭の句ではなかったかと記憶している。今でこそ海月は下村修博士のノーベル賞受賞で一躍注目を浴びる存在となったが、当時は海水浴で刺される電気くらげしか思い浮かばなかった。それにしても海月に継目が無いとは、何と面白い所に目を付けたものだと感じ入ってしまった。これが俳句で云うところの俳諧味であるのだと知った。

ゆらゆらと水中を浮遊している海月のように、主体性を持たずに漫然と生きている人を云っているのかとも思えてくる。

節代さんの楚楚とした佇まいと相俟って、人柄の幅の広さが思われて、楽しくも印象的で忘れられない一句なのです。

水明誌の編集ではご苦勞の多い事。此の度のかな女賞受賞、本当におめでとうございませう。

修復の土偶の乳房百合句ふ

日頃、私たちは急がしさにかまけて、ゆっくりと祖先の生活を考えることを忘れている。ここになつかしい心をゆさぶられる作品に出合った。

土偶はいにしえより、繁榮、豊穡の信仰の対象であった。人類はふとしたことにより火を熾こすのを知り、鎌を作り獲物を捕え土器を作り煮炊きをするようになった。出土の土偶はそのほとんどが欠けているという。

修復された「土偶の乳房」を百合の匂ひに乗せてふくやかさを表現されている。これにより土のぬくみ、風合まで分かるようなゆかしい作品である。人物土偶は、女性を象徴的に造形し農耕社会に於ては生産の神として崇拜した。

因みに、代表的な眼鏡をかけたような遮光器土偶などは現代の人が作ったようなデザイン的にも新鮮である。

いつ青春いまが青春リラの花

節代さんとは同時期に、私は俳句をはじめた。気が付くと、いつの間にか節代さんは遙か前を歩いていった。

作者の魅力ある俳句の中からこの一句をとらせていただいた。

この句はどこかの先生のように大きな声で青春は「今でしょう！」と叫んでいるのではない。何歳になってもどんなに歳を取っても、自分の今が青春であると静かに詠んでいる。白色、淡紫色、桃紫色、淡桃色などのおだやかでやわらかな色のリラの花がこの句を後押しをしている。

作者はやさしい笑顔で物腰はやわらかい方がいいことはきちんと言う。「水明の編集」を担い、水明の中核として活躍している。発想ゆたかで物語性のある節代さんの俳句に私は魅了されている。

黄水仙みな短足の岬馬

太平洋に面した宮崎県最南端に位置する串間市の都井岬。紺碧の海を背景に草原や照葉樹林が広がるこの地は、国内八種の在来馬のうち唯一の野生馬「岬馬（御崎馬）」が生息することで知られている。

江戸時代初期、高鍋藩秋月家が軍馬の放牧を始めて以来、三百年に渡って人為的管理をほとんど加えない周年放牧によって江戸期の乗馬馬の特徴を保存してきた。

終戦後、京都大学の今西錦司氏が野生馬の個体識別に基づく動物社会学の研究に取り組み、その過程で「幸島」のサルに出会って調査を始めたことから、日本霊長類学発祥の地でもある。

作者は咲き乱れる黄水仙の野に岬馬を見ている。競走馬に比べると一回り小さく、短足で体系のがっちりした野生馬の群れには可愛らしい春駒の姿も混じっていたことだろう。

叩いても無言のラジオ冬の朝

掲句から戦後のある日の事を思い出しました。

戦争も終り平和な暮しが戻る、庭の隅には八手の白い花が少し甘い香りを放っている冬の朝の事でした。今迄軽快に音楽が流れていたラジオが、急に止まってしまったのです。

いったいどうした事かと家族が顔を寄せ合っている時に、家族の誰かがラジオの箱を叩いた。以前にも同じ事をして回復した事を思い出して叩いたのでしよう。けれども簡単に回復はしなかつたので、一同がっかりして、ラジオを只見つめました。

無言と言う表現にそこはかたないユーモアを感じ取りました。人間でしたら拒否権を使って口をつぐんでいるのでしようが、ラジオが無言と言う表現が大変心に残りしました。

最近ではラジオは元より、テレビ、携帯電話等も無言とは程遠い素晴らしい時代になったものだと感心しています。

永野 史代

菜種梅雨ゆるりと溶ける和三盆

高級な和菓子原料とされている和三盆は徳島・香川が産地。阿波三盆、讃岐三盆白などが有名（百科辞典マイペディア）

三、四月の菜の花の盛りに降り続く雨のことを菜種梅雨と呼ぶ。

日本には何と素敵な言葉があるのだろうか。和三盆で出来た上質な菓子がゆるり、と溶けるさま。ゆつくりとくつろぎながら和三盆を味わっている作者が見えてくる。その味をたのしんでいる。

日本に生まれて良かったと思える至福のひとときである。

やがて季節はしづかに移ろいながら夏に入る準備をしている。

町野 広子

反戦へ迷はず署名北吹く日

数多の佳句の中で社会的な一句を戴いた。

先ずは「反戦へ」の導入に心を奪われた。そして「迷はず署名」に大いに共感。掲句の一番の決め手は、季語に「日」を付け、その日を限定した事だと思ふ。それによつて署名をした事実や、寒さ、街頭の人々の動きが確実になる。北風の寒い日で一刻も早く暖かい所へ入りたい。しかし反戦の署名を見逃す訳には行かない。その上街頭で署名を促す人々も私共と同年代の方が多い。あの過ちを二度と繰返してはならない。これからの日本を担う子や孫を戦争に巻き込む訳にはいかない。作者の強い正義感と決意に拍手。

斯く言う私も作者と同じで、反戦には必ず署名をする。それこそ、何を迷うことがあろうか。

もう何年のお付き合いになろうか。水明の編集を担う大切な大切な人である。

松本 光子

いつ青春いまが青春リラの花

ほんの少々若いおばさんのころ、まだまだ子育ての真っ只中でした。早くこの世を去った妹の同人誌を見た時の悲しみは今も忘れることは出来ません。私も身体調子が悪く元気になるうと、俳句を詠むようになりました。ポチポチと指で教えながら、俳句の楽しさに気付き、今は亡き「星野徹」様の発案で、若い人達の「珊瑚の会」の誕生となりました。句会場が定まらず、それでも若さの強さ楽しさでちよつと贅沢な？別所沼の鱈屋での句会をやつた事、又お美味しいランチを頂きながらと青春でした。私はリラの花が好きです。枝を分け紫色の小花を多数開きヨーロッパ的な風情をかもす。日本の桐の花も満開の時薄紫色の何とも朝の中空にすずのような音色が聴こえてきそうです。誰かの詩に「青春はふりかえらぬ滔滔とワルツのように流れゆく……」

珊瑚の青春はいつ青春！今でしよう！！

丸山マヌミ

絨毯の花に呑まれたイヤリング

なんて素敵なお洒落たお句でしょう。

ちよっとお洒落をして外出したい時、イヤリングを付ける。どれにしようかと選ぶのもまた楽しいのだ。しかしイヤリングは実に落とし易い。私の場合、落としたことに気づくのは、大抵の場合帰宅してからである。何度悔しい思いをしたことか。

このお句の場合、落とした所が絨毯の上、「花に呑まれた」の措辞から、絨毯は花模様をあしらった華やかなものだろう。落としたことに気づき、探そうとして足下を見ると、ベルシヤ絨毯には、綺麗な花々が織り込まれているではないか。改めてその美しさに見てしまう。「私のイヤリングはこの花の一片になってしまったのかしら、それならそれもいいわ」落としたことを悔やむより、イヤリングが絨毯の花と化したことを楽しむ作者の美感が伝わってくる素敵なお句である。

茂木 和子

葉桜やしつかり結ぶ靴の紐

桜は三度の楽しみ方があると思う。一度目は満開の桜、二度目は葉桜の頃、三度目は秋の紅葉、いづれも美しいが私は葉桜の頃が好きである。寒さから解き放された喜びを謳歌し日本中が明るく元気になれるから。

満開の桜の季が過ぎると急に囲りが静かになりふっと空白が過ぎる。そんな時ふと見上げると葉桜の美しさが目に映った。美しさを花から葉に移した桜。葉桜が作者の背をそつと押している。この寸間をしつかり捉えた作者はその時の心の有り様を「しつかり結ぶ靴の紐」と表現した。しつかり結ぶ靴の紐の意の中には決意なのか、覚悟なのか又は心の想いなのか、読者にも通じる何かを投げかけている。この句に接する度に気持がリセットされ新鮮な心になれる私の好きな一句である。

矢作 水尾

少年に男の匂ひ夏兆す

若葉の頃になると草も木もあざやか、若い人もそれぞれ薄着になり色々目立つ様になる。身長はあれよあれよと親の背丈を越えてゆく。光、躍動、希望いろいろと明るい言葉が浮かんで来る。

かつての我が家子供達の成長期がだぶつて思い出された。作者も私と同じように、かつての御自宅の御様子から、身近な少年を詠まれたのではと推察する。

掲句の下五「夏兆す」は的を射て明るさを増している。

水明の編集を長い間なさっていてお忙しいと思う。しかし句会やその他で、やさしい言葉を返して下さる作者へもう一句

九九の声乗せてふらここ高々と

益々の御活躍をお祈り申し上げます。

山本鬼之介 選



点滅の止まぬ門灯秋暑し
秋の夜やトレモロ長きマンドリン
自転車のペダル踏み来る生身魂
夕支度の匂ふ古民家酔芙蓉
徳利の尻の軽さよ走り蕎麦

さいたま 曲淵 徹雄

秋灯下キープボトルの千杜札
飛行機雲へ蝗の跳ぬる千枚田
法師蟬防人しのお国境
髪黒き旅券の写真秋のバリ
ダム竣功を祝ふ放流水の秋

行田 近藤 徹平

結界へ風生臭し踊唄
生盆や一刀彫の飛驒の里
生盆や書棚に並ぶ発禁本
鳥獣戯画の巻物ゆるぶ十三夜
AIの知るや十三夜のあはれ

横浜 正木 萬蝶

テープ切るゴールの先の鰯雲
鰯雲少女の声の透きとほる
如何ともし難し固き花梨の実
ペン先を登る記憶や秋の潮
武甲嶺の裾に広がる曼珠沙華

鴻巣 大塚 茂子

明易や村の長老田を回る
将門のさ迷ふ御霊沙羅の花
サンガラスタラップ降るる館ひろし
法螺貝の響く稜線夏の雲
聞香に少女の居りぬ夜の秋

さいたま 保坂 翔太

散り残る萩の白さよ夕の風
短冊に淡墨散らす良夜かな
山を見る馬の眼濡らす秋の風
色のなき風を染めゆく野外劇
暮れ残る空き家の硝子秋暑し

川口 野田 静香

棄てられし仏頂面のかりんの実
要下すこしゆるみし秋扇

野仏に季節を告ぐる曼珠沙華
円居して四方山話と茸汁
蒲の穂絮ふはり因幡の素兎

禅寺の磴に色添へこぼれ萩
あまやかな風の重さよ葡萄園
校長の訓辞長々鰯雲

鰯雲連れて旅客機飛び立てり
いつもの席にあなたがゐない秋の風

コンビニの袋と遊ぶ秋の風
山育ち明日は都会の赤とんぼ
爽籟や胸にサクラのエンブレム
法堂を閉ちて坐禅の野分中
さるかに合戦まねて炉端の丹羽栗

夜寒さや亡父に似たる漫才師
百日紅我が家の苦楽見てをりぬ
秋晴のセンターポール日章旗
ダム完成湖面を渡る秋の声
「外郎売」の口上長し秋まひる

高崎 原田 秀子

熊谷 越田 栄子

さいたま 渋谷きい

日高 徹

さいたま 青木 鶴城

草加 河野はるみ

東京 太田 絹映

さいたま 加藤でん治

急登の霧と鎖と力瘤
湯煙を猪口で掬うて月見かな
観月や独りのひとを偲びつつ
哲学へいざなふ寺や柿と鐘
秋しぐれ頭にかざす手の広さ

兄傘寿長姉白寿の生身魂
三線や南の島の生身魂
陽は西に鈴虫ソロで始まりぬ
鈴虫や母の形見の銀の匙
秋の燈に十七文字が解けゆく

たどたどしい幼の手紙敬老日
七〇歳から祝ふ町会敬老日
一致団結の長縄跳びや運動会
月光や児を抱く母のブロンズ像
法名に「月」在る夫よ十三夜

ゆきずりに桔梗一本野仏に
月を待つ一本松へ連れ立ちて
歪なる団子の混じる月見かな
遠野路を行き交ふはただ秋の声
外つ国より絵葉書届く敬老の日

墓碑銘は信女と信士秋日和

白樺のかこむ露天湯虫の声

虫時雨山の出で湯を独り占め

紅茶には薄切りレモン夜半の秋

板山葵をつまに二合半走り蕎麦

ほつこりと芝生は秋の陽を食みて

秋鯨の敲きですすむ手酌酒

颱風来らふそくの影ゆらゆらと

忘るること多き今宵の月見かな

曙や秋蚕桑食む音すなり

鳥たちの飛び立つ枝も秋の声

タンゴを踊り熱き身の内望の月

清められゆく心奥や星月夜

「秋果熟れ山を聳の鳥の群

山盛りの秋果が匂ふ夜の静寂

野分あとやけに煌めく星のかず

竿先にとんぼが居着きひと眠り

キャンプ場ペットボトルに鬼やんま

リハビリの狭き歩幅に秋の風

饒舌が寡黙決め込み栗を剥く

さいたま 染谷 正信

田中 章嘉

宮崎チアキ

新 曆文

宮の森入れば秋声天地より

手弱女の二胡の震へも秋の声

星月夜湖に二つの舟あかり

もう一つ行こか湯めぐり星月夜

ローカル線のホームに炎花カンナ

望郷の伝聞のせて法師蟬

星月夜しじまに溶くる吐息かな

大株に埋もるる寺や風尾花

穂芒を添へて野の花凜と活く

倒るるも花穂は天を野分晴

秋の夜や論語きのふの続きより

中国の歴史を読まむ秋の夜は

新蕎麦を一と啜りしてうなづけり

扁額に「寛政」とあり走り蕎麦

杉箸の香りも添へて走り蕎麦

折れてなほ輝き失せぬ鶏頭花

敬老日漁師の背広座りをる

ダーズリン香る夕さり秋果盛る

秋果盛る丸テーブルの共白髪

日本海の波間を泳ぐ秋の月

さいたま 熊倉千重子

秋本カズ子

上尾 横山 君夫

さいたま 梅澤 輝翠

朝刊よりも重き折込み秋暑し

さいたま 笹本 啓子

秋の夜ルーペで辿る江戸の地図

花梨の実ころげその香を拾ひけり
秋蟬のこゑやはらぎて老い迅し

熊谷 神田 治江

座蒲団ふたつ並べひとりの月見かな

罌雲農婦の髪に白まじる

蓑虫や浮世の憂さを閉ぢ込む

向日葵の芯の強さやたしかなり
線香花火かそけき音の命かな

蓑虫やバンジージャンプの綱長し

秋日和原にテントが点点と

斎藤 みよ

さいたま 山口 韶子

秋風と渡る木の橋石の橋

黒猫に遅れて三毛も来て月見
二階より我が名呼ばるる月の宴
外湯へとつづく小径の秋桜

真ん中が一番好きと棹の雁

疲れ解く白露の外気胸に充つ

身に入むや疵の縫ひたる着物解き

外堀へ金木犀の香が誘ふ

駅前浪士の墓や秋の草

東京 石川 理恵

高橋 敏子

相槌を打つにも疲れ女郎花

居酒屋に集ふ猫どち月今宵
名月や何処に宇宙ステーション
母の忌や垣の木犀香り出づ

墓にもう誰か来ておし白桔梗

夜なべして扁爪の割れいとほしむ

無造作に活ける秋草あを黄色

曼珠沙華一途に生きて米寿過ぎ

失せし物飛んで来し物野分あと

境内に外語騒めく菊花展

さいたま 橋本 京子

大槻 瑤蘭

ハミンクの音の外れや秋高し

絵手紙をはみ出る日輪残暑かな
秋果盛りそこに棲み古取穫祭

蓑虫の外には出さぬ蓑の中

基地困む人の鎖や群れ蜻蛉

貯水池に影を落して雁渡る

風なくもコスモス揺るる地雷原

宿の傘借りて湯めぐり葛の花

赤ら顔ジビエの猪を捌くシェフ

鬼灯や亡き人帰る道しるべ

さいたま 竹澤 和子

東京 水落 守伊

旅先のテントの窓に月の宴

墓域へと続く野の道草の花

想ひ出や酒と鬼灯命日に

道連れはきちきちバツタ父母の墓

秋の陽のあまねく吾子の手折り花

台風一過ゴジラ映画のセツトかと
長長と祈る女や地藏盆
祈る女の涙のあとよ地藏盆

秋空や更地の草が伸びに伸び

平塚 丸屋 詠子

杉戸 佐々木史女

赤蜻蛉群れて小径を占領す

大利根を渡る葬列星月夜

読み聞かす声朗朗と月今宵

人世は流るるままに星月夜
髪あげてその手で開く秋扇

廢屋の屋根皓皓と望の月

節くれの指にやさしき秋扇
鶏頭の芯までほてりあたりけり

蠅螂の紛れ込みたる網代垣

さいたま 新井 孝磨

さいたま 山口 富子

身の丈を沈め芒の銀の原

晩学のこの身励めとカンナ燃ゆ

夕風を待ちてもつれし芒かな

秋澄むや両の手濯ぐ五十鈴川

魂が泡と化したる盆の波

面差しの母に似し人踊り過ぐ
百日紅かな文字躍る七人展

蜻蛉来て茶葉アツサムのティータイム

秋声や朝食前のいす坐禅

はらりはらはら香り散らして金木犀

西幅 公子

東京 石田 慶子

鬼灯を鳴らして佳き日甦る

名画座のシートに二人生身魂

根性で走るマラソン秋の汗

泣き顔はみせたくなくて大夕焼

かぐや姫招く思ひの月見かな

秋桜隣の席に転校生
寄り道は枝豆求め道の駅
寄宿舎にあかりが灯り九月かな

風神の息吹に稲田波打ちぬ

神棚にお焼供ふる菊の宴

夏帽子脱いでより二礼二拍手
大百足一瞬いだく殺意かな
はいはいの嬰取り抑へ天花粉
湯上がりの赤子やはらか天花粉
秋めくや風の音色に草の色

若狭 山崎 郁子

駅ビルの熔くるほどなる酷暑かな
八十路余のつきる日はなく敗戦日
出無精に残る暑さが絡みつく
友逝きて故郷の湖に月昇る
すぐそこに来てゐる秋や風の音

さいたま 水野 興二

菓草を煮てゐる一日残暑かな
敗戦の投手の笑顔秋暑し
秋めくや規則正しき波の音
秋めくや浜にぼつりと人の影
歳の順に座る素直さ秋扇

飛永 鼓

秋澄むや阿蘇に抱かれ馬遊ぶ
秋澄むや尾瀬の木道歩荷行く
愛犬は今雲に乗り秋澄めり
公園のカンナに埋れかくれんぼ
避難所となりし団地にカンナの緋

松田 朋子

草原の鉄路の歪む残暑かな
屋敷神赤飯供へ秋祭
葬列の過ぎゆく野道草の花
嘴染めて烏啄む熟柿かな
ちんどん屋去りし広場を秋の風

さいたま 反町 修

いくたびも戦さ有りしや秋の牧
星涼し青のモスクの静まりて
奪ひ合ふ絹の道なり秋の天
秋入日チンギスハンの討ちし丘
灯火なきバザール照らす二日月

伊 予 向井 章子

鴟猛るそ知らぬ顔の鬼瓦
節搏の指差す小枝鴟の贅
鴟日和奥の部屋まで開け放ち
小次郎の遺髪 of 墓や鴟高音
蓑虫の空の輝き覗き見る

森 和子

秋草の丈や閉校記念の碑
栗飯や八十路がんばるスクワット
秋草や湖畔の径を犬連れて
茗荷の子策に不揃ひ無人店
秋立ちて木曾路めぐりの阿六櫛

さいたま 田中 泰子

秋風や筑波二山屹立す

川口 田村 節子

秋風や名もなき花も実を結び

電柱の影さへ嬉し残暑かな

さいたま 高原 和子

星月夜稜線黒く迫り来る

老犬の少し元気に白露かな

高く深く広がる空よ野分あと

車椅子押し行く堤白露の日

ゆらゆらと湯舟に交じる望の月

丁寧ナイフを入れて栗羊羹

秋風に流るる雲の速さかな

さいたま 塩野 久子

栗飯を崩れぬやうに皿に盛る

やや遠くなりし片耳虫しぐれ

横浜 川島 典虎

秋風に乗りて舞ひ立つ小鳥たち

啄木鳥の来て知らざる木の寿命

怖怖と笑み栗拾ふ峠道

虫しぐれ土間ある家の尊さよ

交番に一際目立つ彼岸花

名月の雲間隠れを止められず

天窓を仰ぐベッドの月見かな

秋山 紅花

遠方の友とスマホの月見かな

祭太鼓引つ込み思案と思ひしに

蕨 細井 良子

歓声や外湯めぐりの秋の旅

秋簾外し季節の移りゆく

秋彼岸日の入り惜しみ畑仕事

菜園の葉ものに露の光りけり

チェロのこゑ寄り添ふやうに秋の夜

下川 光子

柴折戸を風の開きて縞すすき

蕨やぼつりぼつりと街路灯

教会のランタンうるむ秋の夜

秋の夜埠頭のバーのオールデイーズ

母を待つ秋夕焼の只中に

秋の雲靴に古き住所録

秋夕焼長寿地藏の首傾ぐ

船頭の追分響く秋の空

川崎 鈴木 玲子

園児らの縄電車行く秋日和

躊躇なく蟻螂食ぶるめがね猿
逆説で終はる会議や秋夕焼
秋晴や逆三角の肩で産まる
小かまきり透明鎌で威嚇せり
夏休み竜宮城から帰還せり

さいたま 山戸 美子

のど癒す一顆冷凍黒葡萄
葡萄美し新種大粒黒緑
富士仰ぐ斜面をつつむ葡萄棚
畦道はくれないる通り曼珠沙華
榎植の実生のアロマを楽しめり

東京 鈴木 和子

敬老の日銘菓を夫と半分こ
月白に続くハイウェイ宙の旅
名月の池塘に立ちぬかぐや姫
月今宵杖を友とし忍び逢ふ
坊さまの箒目の美し金木屋

福田 育子

望の月見よと隣室よりノック
秋霖に煙る野道を傘二つ
窓拭くや桜若木に初紅葉
友の詩にうさぎの葉置く良夜
敬老日言祝ぐ余力ありやこの国

横浜 山岸 弘子

盆踊もう踊れない踊りたし
秋祭「宿泊券」の当たり
リニユール句ふ豊や秋の宿
運動会中止となりし笛太鼓
新涼や下校のチャイム冴え渡る

和歌山 高橋満耶子

初対面の従兄弟どうしや菊かほる
吾亦紅涙をこらへ喪主凜凜し
白菊や尊父に似たる喪主が立ち
満中陰の餅切り分けて涼新た
窓開けて満月をまつ献花台

和歌山 葛城千世子

爽やかや会釈を交はず異邦人
片言の美しき日本語さやかなり
秋彼岸庫裡に鎮座の白い猫
墨染の足取り軽し秋の風
抽斗の土鈴ことりと秋の風

宮井美恵子

切通し越えればそこに葛の花
良夜かな犬と寄り添ふ影法師
萩叢が古刹の径を隠しけり
女郎花夕映えの道どこまでも
秋簾軒端にすがる馬籠宿

さいたま 白田 みち

秋の夜やことりと重き鍵の束
新蕎麦を秀衡碗に供へたり
秋の夜雨ふる音をひとり聴く
蚊に刺され全治三日の痒さかな
藪じらみ取りて散歩の終りとす

栃木 佐々木典子

秋暑し物忘るやら落すやら
仲秋や潮また隠す遊歩道
鶉鳴くやへつぴり腰の丸木橋
ソムリエの勿体つける良夜かな
田の中に一族の墓生身魂

いすみ 平石 睦子

秋茄子や美顔薄れて味勝負
眼が踊る月の宴の里料理
折紙の箱にあめ玉敬老日
敬老日口と体力増進す
下戸の夫偲びて独り月見酒

さいたま 小川 洋子

草陰の蟬を弔ふ独り旅
朝顔の一日かけてたたまれり
ちちろ虫鳴き音は側にお題目
一本に円陣組みて毒きのこ
向日葵や大地を見つめ種熟す

大阪 飯塚智恵子

女郎花投込み寺の庭静か
山の子や猫のお墓に桔梗花
女郎花いつばい咲かせ火宅なり
謀反にも理由のありけり桔梗花
桔梗の花開くまで見ると言ふ

町田 瀬戸雄二郎

いらだちし携帯故障秋暑なり
秋暑し歩の進まずに戻りくる
秋暑し熟年夫婦手をつなぐ
秋暑し訪ねる家は留守ばかり
秋暑しシャッター裏は温室か

和歌山 南條きわゑ

天と地と溶け合ふ銀河星の郷
時間割りの無き一日や蛍草
陳南瓜羅漢の頭ごっこつと
秋草に深く美田の隠さるる
秋草や峠の地蔵の隠れ道

小浜 松島 寛久

着ぶくれて朝のホームは迷路かな
白鳥は絹の羽根色みせつくる
抱きあげて小春のやうな仔犬かな
犬鳩と童おしやべり一茶の忌
泣きながら別れの時を雪だるま

所沢 関根 千恵

譜面見てフルートを吹く秋の夕

宮代 関谷多美子

老兄弟の話は尽きず菊の宴

秋夕焼を静かに写す潦
大潮の雨月の海の憂ひかな
尺八を置いて酒飲む雨月かな

さいたま 飯田 忠男

秋澄みて地元高校吹奏楽

秋水を己の墓に掛けにけり

夕刻の駅舎の窓に稲光

いざ出勤残暑ものはペダル漕ぐ
終電を逃し見上ぐる十三夜

温もりの名言女優九月の忌

かな女忌や祖母の残せし鯨尺
煽ぐたび妣の香りの秋扇

吉川 杉浦 理恵

秋の陽をしたたか浴びて荘へ急ぐ

東京 河原 叔子

夕空の遠き鱗やいわし雲

紙飛行機秋草の野に急降下
画用紙の空に増しゆく鱗雲

赤とんぼ群なし来る高原の朝

若狭 岡本 祥子

マイカーの窓に突進赤とんぼ
穂芒を一括りして荘を閉づ

振り向いて見遣る目力大蟻螂
夕闇のまるで伴奏虫の声

ピル街を踊るサンバに人の垣

さいたま 武田 重子

盆踊り幼馴染の輪が出来る

廃校のサルビア子らを待つごとく

福井 檜鼻ことは

熊よけの鈴を付けあひきのご狩

秋の海影絵となりし親子かな
葛の花老いし母との昼餉かな

あちこちに手締め之音や朝顔市

梨喰ふやひとつ減りたる処方箋

秋の声黄ばみし古書の匂ひかな

湯浅 和

新刊の帯にひかれて秋の夜

奉納の舞台待つ杜涼新た
絵手紙で届く優しさ芙蓉咲く

春日部 諏訪サヨ子

裾絡げ赤き蹴出しで盆踊

名水汲み里人捏ねる走り蕎麦
足止めの成田パニック台風圏

雲海のかなたに淡く富士のぞく

明月の皎々として樹々の闇
旅に出て地酒に酔へり月今宵
初島を匿ふ秋の沖の波
嵐去り遠近拾ふ新松子

さいたま 櫻井よし江

ガラス吹く職人の町残暑かな
重陽や幼馴染と冷酒酌む
秋の虫吹奏樂のごと聞こゆ
風呂に入り耳を澄ませばちろ虫

さいたま 野村 美子

大粒の雨のあとから秋の蟬
朝市や無造作に置く秋の草
目に余る傘の残骸台風禍
街路樹の力尽きたる野分あと

東京 柳父 はる

敬老日老いてもやんちや止まぬかな
おやしらず生ゆる八十路の秋涼し
江戸つ子や今日入荷の走り蕎麦
店数多紛ふ木曾路の走り蕎麦

安倍 弘夫

雲消えて庭に床机の月見酒
月見れば餅つくうさぎ時流れ
蟻螂の威嚇のポーズ真似てみる
蟻螂の共食ひするは恐ろしや

さいたま 千坂 平通

栗羊羹前歯の欠けし児の笑顔
寝不足に始発のベルや白露の日
白露なり山河草木彩生まる
厚切りの栗羊羹を試食せり

山下ユリ子

台風のそれで四人の甲斐の旅
母の忌は大根まく日と習慣に
和菓子屋の芒土産にいただきし
境界の塀ひしやげたる野分かな

鬼石 榊原 聰子

鍵つ子にお手紙付きのマスカット
切れ切れの父の思ひ出鱈雲
鱈雲甲斐の山々繋げをり
一粒の残りの「巨峰」じやんけん

東京 飯室 夏江

菊の日や元気に揃ふ六兄弟
吹き荒るる野分の音や夜を通し
ことのほか雲丹井旨き蝦夷の旅
吸ひこむやマイナスイオン滝しぶき

さいたま 森下美智枝

秋雲ややり残したことやれること
秋の雲近き外つ国ゆく先は
靱殻に肩を寄せ合ふ紅りんご
台風一過倒れたる木に足とられ

畑宮 栄子

空蟬や脱いで来し殻我にもありや
見送りの島の父さん秋夕焼
特Aの喜び詰まる今年米
束ねても淡きまなる野菊かな

草加 外村 紀子

ひび塗の祖母の重箱菊節句
重陽や老舗駄菓子のはっか糖
石積みし貨車に寄り添ふ蕎麦の花

越谷 阿部 幸代

天上へ泰山木の花旅立てり
巾着田台風去つて一気に咲く
曼珠沙華五指の通院嘲笑ふ
瘦せ伏して鴟の贅にもなりきれず

藤沢 小島喜代子

程ほどで済まぬおしやべり秋桜
愛唱の校歌と刻む秋さんぽ
秋麗背丈伸びたる甥のひげ

大阪 遠藤 人美

掛け声で村を聞き分け秋祭
打つ音も重さもよかり大西瓜
ピシと閉づ恋歌書かる秋扇
宵闇や携帯を見る顔に恋

千葉 橋本 竺仙

風鈴や露地の裏にも江戸情緒
湯けむりや細き父の背そつと撫で
短夜や寸暇惜しみて文綴る

さいたま 佐藤 克之

大人びて見ゆる日焼児始業式
ご近所のこぼれ話や秋の風
通学のどん尻をゆく秋茜
あれこれと粧ひ迷ふ秋はじめ

和歌山 嶋田 洋子

曾孫から月見団子の数増やし
蟪蛄の眼と目が合ひて草の原
道草や蟪蛄の目に夕日かな

上野 宜子

吹く風にやさしき秋の生まれくる
夜風吹きやうやう月のふくらみぬ
秋澄みて隣家の朝餉匂ひくる
メタセコイアを抜けゆく風や秋の声

さいたま 菅原 真理

うるこ雲はしやぎ疲れし遊園地
けんかせし二人にハートのマスカット
ぶだう食むじやんけんの声嘻嘻として

緒方みき子

金婚の旅の計画秋の夜

秋の夜寝酒を兼ねし独り酒

老犬の息の安らぐ秋の夜

さいたま 鈴木 藻好

白波のあとに白波秋夕焼

大皿にすだちをきゆつと絞る朝

秋時雨猫といつしよの雨やどり

木村るみ子

西瓜積み一輪車押す母の背

ビル谷間踊櫓の組みあがる

秋の蟬この世の別れ鳴き惜しむ

岡田 宣子

秋の蟬読経する声響きけり

秋夕焼丸も四角も飲み込んで

空高く君への思ひ伝へたし

小駒さち子

鴟が鳴く高い梢にひと休み

蓼虫や枯れし小枝にゆれてをり

枝の先芋虫ゆるる風の中

内田 雅代

博物館火焰型土器秋暑し

北欧の友からメール雁渡し

盆の寺竹馬の友と遇ひにけり

綿貫ひさの

みのつけて壁に貼りつくオオミノガ

賜日和繩張り競ふ早贄に

暑さにも負けずピンクの百日紅

さいたま 落合 和枝

富士の嶺の名月仰ぐ露天風呂

日が暮れて響く鐘の音いわし雲

残り香を置きて婦人や酔芙蓉

三郷 沼尾 岳

七五三欣喜雀躍双子の娘

耐へ凌ぎ九夏三伏越えて秋

献血のあとに駆け込む壺焼屋

小川 藤間 友二

十一月号に振替用紙を入れました

振替用紙を年二回、一番ご利用の多い時期に合わせ、

五月号と十一月号に入れてありますので、この用紙を

使いお振込み下さい。なお、既にお振込み済みの方は、

次回の振込みにご使用下さい。

総務部

令和2年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応募句	未発表作品：15句（表題を付す） 水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可。
締切	令和2年2月末日（発行所必着）
応募方法	水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員（7名）

山本鬼之介 山中 順子 星野 和葉
茂木 和子 境 延昭 五明 昇
網野 月を

新珠賞推選委員（6名）

宇田 白鷺 大橋 勉代 大村 節代
小林萬二郎 椎野美代子 波多野寿子

作品評

山本 鬼之介

点滅の止まぬ門灯秋暑し

曲淵 徹雄

「残暑＝秋暑し」の実感を如何に捉えるかがこの季語の本質であろうが、それを体感で得ようとすると個人差があり、作者の意が読者に伝わりにくい面があると思う。

本句が優れているのは、「秋暑し」を視覚と聴覚によって確りと捕捉していることで、普遍性のある俳句である。一〇ワットか精々二〇ワット程度の蛍光管の門灯であろう。両端が黒くなってきた、それが更に進行するとはちばち音を発して点滅が始まる。妻に蛍光管の交換を頼まれるが、面倒くさがってなかなか実行しない夫。妻と夫の埒もない口喧嘩が続く間、門灯の点滅が続くのである。じつとりと汗をかく残暑の夜、徒でさえ鬱陶しいの目と耳に飛び込んでくる不快感が読み手にストレートに伝わってくる。

秋灯下キープボトルの千社札

近藤 徹平

千社札は、江戸時代中期以降に始まり、神社仏閣の参拝記念に建物や器物に貼り付けた主に紙製の札で、手書きから木

版刷に移行し、墨刷の他に錦絵のような多色刷のものも作られるようになった。木版刷のものは結構金がかかるので、近年では、低コストで簡単に作れるシル製のものが多い。昔は寺の山門や神社の手水舎など至る所に千社札が貼られていたが、現今では、無許可で貼ると器物損壊罪・建造物損壊罪・文化財保護違反などの罪に問われることもあり、殆ど見掛けなくなった。

さて、掲句の千社札はそのような歴史的背景に基づく用途ではなく、名札として自分の所有物に貼り付けた千社札である。他人に迷惑を掛けることなく、昔ながらの木版刷りの凝りに凝った千社札を名札として用いている。

仄かな秋灯が、磨きぬかれたカウンターを照らしているクラシックなバー。美髯をたくわえた初老の男が、キープボトルから注いだ手酌のウイスキーをゆったりと口に運んでいる。日本文化を投影している千社札と、ヨーロッパ調の雰囲気を持つバーの雰囲気とが融け合う優美な俳句である。

鳥獣戯画の巻物ゆるぶ十三夜

正木 萬蝶

十五夜の名月は格別であるが、ひと月ほど経った後の月すなわち十三夜にもそれに劣らぬ趣がある。夜間の冷気をいくらか感じるようになる季節でもあり、冴え冴えとした月を仰いで思いに耽ることも多からう。

京都市右京区高山寺に伝わる鳥獣戯画は、日本最古の漫画

とも称され、我々が小・中学生の頃から教科書で出会ってきたのでとても親しみがある。

絵巻は、甲・乙・丙・丁の四巻に分けられているようだが、兎や蛙や猿などの動物が擬人化されて描かれている甲巻が最も有名である。

十三夜の月の宴に浮かれる人間共の声に誘われ、緩みだした絵巻物から這い出してきた動物たちが踊り出すという、何とも幻想的で優雅な俳句である。作者も読者も、戯画の中の一員として十三夜を満喫している。

ペン先を登る記憶や秋の潮

大塚 茂子

秋の海の潮騒を聴きながら、宿の一室である人に手紙を書いている。その相手は、以前共にこの地を訪れたことのある人なのだろうか。いろいろの想い出が甦ってくる夜のひととき少し窓を開ければ仄かな潮の匂い。これがまたその人への思いに繋がる。様々な記憶を、「ペン先を登る」と形容したことが素晴らしく、筆者に勝手なロマンスを描かせることになった所以である。

サングラスタラップ降るる館ひろし

保坂 翔太

館ひろし（本名・館廣）、一九五〇（昭和二五）年名古屋市生れで現在69歳。職業は、俳優・シンガーソングライター・タレント・キャスター。往年のテレビドラマ「西部警察」で

大型バイクを駆使する異色の刑事役で活躍、石原裕次郎と渡哲也に憧れて石原プロモーションに入社。後に「あぶない刑事」など、テレビドラマや映画で本領発揮。現在も時代劇やコミカルな役柄まで幅広く活動中。現在「〇〇〇ルーペ」のテレビコマーシャルで日々顔馴染みである。

さてこの俳句の本意は如何に。高齡の男から見ても格好いと思う館ひろしが、サングラスを掛けてゆったりとタラップを降りてきた、というのが表向きの解釈になるが、あるいは、作者が館ひろしを気取ってのポーズかも知れないと思わせるところに、作者の悪戯心が潜んでいる。

散り残る萩の白さよ夕の風

野田 静香

その場所で全盛を誇った白萩もいよいよ終焉の時を迎え、地を清楚な花卉で埋め尽くしている。枝に残っている僅かな花卉も、折からの無情な風に果無い命を保っている。純白の打掛けを羽織った花嫁のような白萩に魅せられた作者の感性がひしひしと伝わってくる作品である。

野仏に季節を告ぐる曼珠沙華

原田 秀子

小川の土手や田の畦道などに群生する曼珠沙華は実に鮮烈で、遠見には野に立つ焰（ほむら）である。単調な景色の中に埋もれる何時も眠たげな野仏にとって、曼珠沙華は強烈な覚醒効果をもたらす花である。「季節を告ぐる」が、実に心

の籠もった表現である。

禅寺の磴に色添へこぼれ萩

越田 栄子

第六句の白萩から一転しての紅萩であろう。厳肅な修行の場である禅寺の高い石段とこぼれ萩の対比。単調な色合いの禅寺に爽やかな一点の色を添えた萩の花である。

コンビニの袋と遊ぶ秋の風

渋谷きいち

街のそこかしこにあるコンビニエンスストア略称コンビニであるが、今その終日営業の見直しなどの問題で世の注目を浴びている。コンビニを利用した客が不作法に捨てたレジ袋が折からの突風に煽られ、地を転げて舞い上がり、また地に落下する動きを繰り返す。無機質なポリ袋と自然の風との絡み合いを、「遊ぶ」と表現して俳句の境地に引き上げた。

秋晴のセンターポール日章旗

日高 徹

今年の秋に大ファイバーしたラグビー場をはじめ、野球場やサッカー場・陸上競技場などの正面に立てられた柱で、少なくとも三本、多いときは七本くらい立っているように思う。外国チームと戦う場合、日本の選手には、センターポールの日章旗の存在が偉大であると思う。雲一つ無い快晴の秋空に、翩翩とひるがえる日の丸の旗が、選手達に大きな力を与える。

急登の霧と鎖と力瘤

青木 鶴城

七合目を過ぎると草木も次第に少なくなり、頂上に近づくとつれ石や岩が多くなる。いよいよ危険いっぱい岩場のあがる登山路で、登山者は鎖場の鎖に身を託し、一步一步慎重に歩を進める。辺り一面に立ち籠めた霧に鎖が濡れて手が滑り、なかなか思うように進めない。逞しい山男の二の腕の力瘤が一層盛り上がり、ラストスパートの時を迎える。立体感と臨場感の溢れる俳句で、読んでいて思わず力が入ってしまった。

陽は西に鈴虫ソロで始まりぬ

河野はるみ

出だしのフレーズから判断して、野原か公園か、或いは庭に居るいわゆる野性の鈴虫かと思うが、屋内の甕の中で飼われている鈴虫かも知れない。何れにしろ、太陽が西空に傾き、夕暮れ時が迫っている。虫の本能で己の出番の時を察知しているのか、先ず鈴虫が先頭切って鳴き始め、他の虫たちが追随するのである。まるで人間のコーラスのような見事な演出である。

法名に「月」在る夫よ十三夜

太田 絹映

何と素敵な法名であろうか。全て明らかにされれば、もつと感激することであろう。十三夜の月を仰ぎつつ、その月に

相應しい夫のことを偲んでいる妻も、亡き夫に勝るとも劣らぬ佳人であろうと推察する。

月を待つ一本松へ連れ立ちて

加藤でん治

本句に登場する一本松は、平成二三年三月の東日本大震災にまつわる「奇跡の一本松」のことであろうか。もしそうだとすると、物語的要素が大きく、本来の俳句としての共感が薄れるような気がする。野末にある名もない一本松へ連れ立つと解釈することで、ほどよい物語が生まれると思う。

虫時雨山の出で湯を独り占め

染谷 正信

一読して情景が目飛び込んでくる。高所にある鄙びた温泉で、昔むかし弘法大師が見付けた秘湯の一つかも知れない。満天の星空の下で、周りに集く虫の声を聴きながら、露天の湯を独り占めしている。こんな幸せがあつてよいものか、もしかして夢ではないかと手を抓つたら痛かった。

秋鱒の敲きですすむ手酌酒

田中 章嘉

前句に続いてこりやまた結構と思わず掌を打った作品で、相好を崩して盃を傾けている作者の顔が見えてくる。秋鱒の当てが最高である。

タンゴを踊り熱き身の内望の月

宮崎チアキ

ダンス教室からの帰り道。図らずも名月の日であり、大きな月が路上を照らしている。情熱的なタンゴのレッスンを重ねたので心身ともに火照っている。折からの満月が心の昂ぶりを一層駆り立てる。中七の「熱き身の内」が、全てを物語っている。

野分あとやけに煌めく星のかず

新 曆文

台風ほどではないが、朝からの風雨が治まり、満天の星の夜を迎えた。「やけに煌めく星のかず」が、その時の作者の心境を素直に表現している。

秋風と渡る木の橋石の橋

斎藤 みよ

現代において、木橋や石橋は貴重な存在である。気ままな旅のひとつ、里山を散策しているの情景か。子供の頃に遊んだ日本の原風景に再会し、目を輝かせている作者の様子が読み取れる。「秋風と渡る」と詠んだことで、締めりのある俳句になった。

黒猫に遅れて三毛も来て月見

山口 韶子

人の居ない月見の俳句が魅力である。名月の光が降り注ぐ屋根の上。先ず黒猫が登場し、次に三毛猫が来たと言う。さてその次にやって来るのは……と、読者に問いかけている。たぶん白猫も来るだろう。シヤムやペルシヤも来るかな。

水琴窟

(夏季競詠鑑賞・十月号)

池田 雅夫

雑草の伸び放題に日の盛り

水野 興二

昼前あたりから三時過ぎくらいまでが最も暑い。万物は日の傾くのを息をひそめて待っている。畑は水気を失い、風に吹かれて土埃をたてるばかり。そんな日盛でも雑草だけは生き生きと強かに茂っている。その生命力にあきれるばかり。

遮断機の人知れず開く日の盛

秋本カズ子

郊外の景であろうか。日盛の町は人影もなく、走る車も少ない。時折通る電車の踏切りの音が無気力に聞こえてくる。日盛の無人の踏切りという場面設定が的確に詠まれている。「人知れず開く」に、人間の無力さが強調されている。

日盛の深山に響く垂水かな

加藤でん治

深山と云えども日盛は厳しいものである。山巒深くで轟く無名の滝。マイナスイオンの清涼を全身に浴び、活力を取り戻している。季重なりを避けるために「滝」と言わずに、あえて「垂水」としたところが推敲の証であろう。

笹百合に包まれ大和一宮

向井 章子

奈良市春日山に発し、佐保川に入る率川(いさかわ)。その近くにある大和一の宮の率川神社。「三枝祭」は有名で、笹百合でいっぱいだという。歌枕にもあるようだ。趣のある大和路を飾るにふさわしい笹百合に魅了されたことだろう。

日盛に白杖の音こつこつと

白田 みち

日盛といえども出かける用事を欠かすことができない。あるいは、日課としている何かがあるのかも知れない。「白杖の音こつこつと」に、授けた運命を真摯に受けとめ、慌てず焦らず、着実に生きる姿が窺える。それを見守る姿に感動。

鹿の子百合君の誘ひにや乗らないよ

飯田 忠男

鹿の子百合は四国、九州に野生するが、多くは観賞用に栽培される。「君の誘ひにや乗らないよ」の口調が啖呵めいてさわやかに残る。山百合に似て艶めかしく感じたのであろう。男の発想をストレートに表現したところに共感する。

大淀の川底あらは日の盛

飯塚智恵子

琵琶湖に発源し、木津川、桂川と合わせて大阪湾に注ぐ淀川。「水の都」と言われる大阪の象徴でもある。その淀川の底があらわになるほどの日の盛りに人は悲鳴をあげている。

垂るほどに百合の花咲く屋敷跡

河原 叔子

かつては隆盛を誇った屋敷であったのであろう。今はひっそりとその跡が残っている。手入れのゆき届いた庭に咲き誇っていたであろう百合の花。当時を惜しむかに咲いている。副助詞の「ほど」には連体形の「垂るる」でつながる。

ラグビー選手の腿たくましき日の盛り

鈴木 和子

ラグビーワールドカップの熱き闘いが繰りひろげられている。七月ごろは、その調整、準備の重要な時期である。選手の体格に圧倒されるとともに、その激しさに驚嘆している。上五の大胆な字余りも、その迫力で押し切ってしまった。

下校する赤白帽子日の盛り

千坂 平通

赤白の帽子というと、運動会を連想する。または集団で行動する児童が身につける場合もある。低学年の下校時刻はおよそ午後2〜3時ごろで、日盛りのさ中。その暑さの中でも児童の元気な姿、楽しそうに下校してゆく様子が見える。

白百合に囲まれ永遠の別れなり

森下美智枝

白百合は葬儀に使用されることも多く、厳かな面持ちがある。白百合を棺に入れて安らかな眠りを祈っている。「別れなり」と断定しているところに一層の悲しみを感じる。

ゲレンデの百合の花園村起し

野村 美子

冬期賑わったスキー場は、夏期には営業をせず、草が茂っているばかりのところもある。が、近年はさまざまな花を植え、観光の拠点にしている。これといった名所や施設がない村の起死回生の策として百合の花園が役立つている。

日盛りや大会近き運動部

内田 雅代

運動部の練習は厳しく、益も正月も休みがないという。辛い練習の成果を発揮する大会が近い。迫る大会に備え、猛暑であっても手を抜くことはできない。「日盛りや」に大会への意気込みが感じられる。勝利の女神が微笑むことだろう。

日盛りや鉄柵熱き船着場

小山 敦子

船着場には日陰をつくる樹や建物が無い場合が多い。規模の小さい漁船であろうか。あるいは渡し舟の場合もある。そこにはむきだしの鉄柵が棧橋に付いている。平凡な暮らしの中で、季節の移り変わりを楽しむ余裕が見て取れる。

濃き化粧に一步身を引き百合の花

沼尾 岳

百合の中でも特に、山百合は芳香を放つ。狭い部屋では、くらくらするほどである。あまり見かけなくなった女性の厚化粧。もしも出合ったなら、やはり一步身が引けてしまう。

鼓

笛

集



山中順子選

南條きわゑ

保坂 翔太

ポストイン 鈴虫鳴きて迎へらる
秋茜過疎の川面の水甘し
台風で息子帰れず無理無理と

絵本読む母もまどろむ合歡の花
絵団扇を差し出す店主聞き上手
新涼の東京の灯よタワーの灯

正木 萬蝶

「外郎壳」の口上長し秋まひる
虫集く外階段の夜更けかな
母卒寿団栗ひとつ拾ひけり

日高 徹

橋本 京子

大空へ旅立つ佳き日蒲の穂絮
野仏の笑みもどりたり台風過
捕らはれし白鼻心鳴く夜半の秋

原田 秀子

西幅 公子

爆音立てツーリング行く刈田かな
紫蘇の実や老ゆる女のほのほのと
足元の小さき世界や秋の草

飛永 鼓

野田 静香

何処からか部屋に舞ひ込む蒲の絮
公園のベンチに一人秋思かな
秋茜水面を叩き産卵す

田中 章嘉

菊枕きみの腕を恋ふ夜の
ふつと出る妻の訛や小鳥来る
桔梗濃し昨日まで夫臥せし間の

喜寿祝ふ女四人の菊日和
柿照るや人影動く轆轤小屋
そぞろ寒益子の皿の重たくて

介助犬凜と歩むや秋の暮
秋の霜降りて菜野菜しまりけり
スーパ―の特等席のりんご「富士」

船頭の声高らかに秋の川
鶴鴿の飛び立ち石に陽の残る
椿の実頼れる友は聞き上手

晩秋や入り日に映ゆる紙の里
木の実落つ拾ふ園児の赤き靴
プラットホーム仕事帰りの秋夕焼

野村 美子

ブロッタ塀の小さき草むら鳴くちちろ
朝露を踏みしむ犬の勇み足
新米を入れし米櫃光りけり

細井 良子

湯たんぼの位置を確かむ旅の夜
秋の暮線路を歩く人と牛
薪背負ひ歩く子の目の爽やかに

田中 泰子

父母も遠忌になりし秋思かな
ホバリングして離れぬや秋の蝶
友訪ふ濡れし紅葉の石畳

田村 節子

堤防を次々破壊秋出水
秋出水大活躍の「地下神殿」
秋出水災害ごみの行方かな

高橋満耶子

残菊といへど明るく小さき庭
降り続く雨に残菊痛痛し
暮の秋心許なき家路かな

高原 和子

炬開や夫張り切りて裏方へ
直撃の遅き颯風身を潜め
亥の子餅経木を敷きてお供へす

長井喜代子

使はれぬままの団扇の所在かな
ふるさとの恋しや柿の色づけば
興深き本あり夜長楽しかり

寺内 洋子

私の好きな一句（自句自解）

村杉 清吉

風光りチーム鼓舞する大太鼓

良く散歩をする県営大宮公園の一角に県営球場があり
ます。野球シーズンになりますと高校野球の試合が行な
われ、応援団の太鼓の音が聞こえてきます。両校の熱戦
が繰り広げられている光景が目に見えます。

鼓笛集作品評

山中 順子

菊枕きみの腕を恋ふ夜の

桔梗濃し昨日まで夫臥せし間の

正木 萬蝶

両句とも「の」で終っている珍しい作り方であり、七七がついても成り立つ句ではあるが、詠み手にあとは任せる作者の考えも計算されている。「の」から上五の季語に戻るあいだの間なのである。

喜寿祝ふ女四人の菊日和

橋本 京子

七十七歳まで達者で女友達と祝う菊日和は話題もつきないでしょう。いつまでも続くこと祈ります。

特集

俳句四季新人賞

最終候補者競詠

新人賞受賞記念作品

吉田篤子

※巻頭句

高橋悦男

岸原清行

檜 紀代

山崎十生

河村正浩

小路智濤子

※今月の華

関 悦史

水田むつみ

※俳句と短歌の10作競詠

渡辺誠一郎

佐藤通雅

※その時、俳句手帳

上田日差し

※好評連載

網中いづる

SEASONAL
KALEIDOSCOPE

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、
俳人の響き

藤村公洋

俳句のつよみ
二ノ宮一雄
一望百里

俳句四季

Haiku Shiki

2019年12月号

11月20日発売
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/>

東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

句集喝采

井口 俊晴

◆江島照美 「発火点」

文學の森

著者略歴 昭和二十八年熊本県生。平成十五年「雲の峰」入会。二十年「槐」入会。二十一年「槐」同人。二十九年「槐賞」受賞。令和元年「槐安集」同人。関西現代俳句協会理事。現代俳句協会会員。

文學の森が刊行する「女性俳人精華100」の一冊だ。著者は「人生の岐路的な時、自分を冷静に見つめられたのは、俳句をしていたからだ」と自負しております（あとがき）と言っている。

炎昼やわたしのなかの発火点

秋の朝姥は美婆へと目覚めけり

かなかなのこゑに火の付く恋心

曼珠沙華いけないことはしてないわ

華やかな雰囲気の句が並んだが、ご本人は夫の会社経営を支えるかたわら二人の子を育て、四人の孫を持つ堅実派だ。

一番目の句は句集のタイトルになった。

飼主も同じ顔なり春の昼

歯抜け顔並んでゐるよ入学児

雪達磨老いては同じ顔となる

佐助や余命を知りて生くる人

飼犬の顔は飼主に似てくるという。乳歯が永久歯に生え変わる途中の子供、どちらもユーモラスな情景だ。一方、人生に永遠という言葉はない。抒情性と客観性、悲しみに負けぬ冷静な目が絶妙なバランスをとっている。

◆後藤秀治 「国東から」

私家版（書肆麒麟）

著者略歴 昭和二十六年大分県生。平成二十四年「円錐」中津句会に参加。二十五年「円錐」同人。

俳句を始めた五十代半ばから平成三十一年まで、約十五年間に詠んだ二百余句を収めた第一句集である。

花海桐遍路は波に酔ふことも

竿先にひたと満ちたりさより潮

おーい雲末黒の阿蘇へ雨落とせ

かなかなの故山遠のく一鉄路

国東半島は大分県の北東部に位置する。南側に別府湾、東側は伊予灘、瀬戸内海、北側を周防灘に囲まれている。海に縁のある句が目につくのはそのためか。一方、民俗学の面でも興味深い行事が伝えられてきた。

行く秋のひたすら笑ふ神事かな

落蟬のまだある息が千代と鳴く

炭焼の絶えて山の名忘れられ

人は去り筍山に雨気籠もる

著者の活動の場はもっぱら地元・大分にある「円錐」中津句会であると聞く。生まれ故郷で、今もお住まいのある豊後高田市とは遠くない。

「国東から」という句集名について、著者は「国東の海岸から周防灘へ句集という瓶を流す。どこで誰に拾われるのだろうか。いつか誰かに拾われて、中の一句だけでも面白いと思ってくれたらうれしい」（あとがき）と書いている。

『俳句四季』（十一月号）花の歳時記

桔梗

文：山本鬼之介
(水明)



俳人と呼ばれる身でありながら、肝心の花鳥諷詠が不得手な筆者にとつて、この度の課題はいささか厳しいものであった。さて、何の花を選ぶかで暫し迷ったが、それ程の時間をかけずに「桔梗」が浮かんできた。脳裏の奥に、この花に纏わる過去の出来事が想い出があったからだと思う。近い過去と言えば、四年ほど前に吟行した「秩父七草寺」の一つである多宝寺の桔梗で、桔梗畑に整列した青紫色の花々に鮮烈な印象を抱いていた。しかし、

今回引き金になったのは、単に視覚で捉えたものではなく、もつともつと心の奥にまで入り込んでいた桔梗だとの思いに到った。そこで更に思考を巡らせた結果、京都市上京区北之辺町の「廬山寺」の桔梗に行き着いた。

思えば、現役サラリーマンの晩年に差し掛かった平成二年、二度目の大阪勤務で単身赴任したが、時と地の利を得て若い頃から親し

桔梗に
時を忘るる
古都の昼

山本鬼之介

めぐりあひて
見しやそれとも
わかぬ間に
雲がくれにし
夜半の月かな

紫式部

んできた古都巡りを再開した。

同年残暑の時季であったと思うが、上賀茂神社・下鴨神社を参拝し、京都御所を見学、御所の東側に位置する梨木神社に寄つて、千年以上前から湧き続けている「染井」の清水で喉を潤し、その足で廬山寺(正式な寺名は廬山天台講寺)を訪れた。

学術調査で、昭和四十年にここが紫式部の邸宅の跡であったことが判明、以来源氏物語ゆかりの寺として観光客の人気スポットになった寺院である。

という流麗な文字が刻まれた歌碑(紫式部が幼友達Ⅱ男性らしいⅡに会った時の気持を詠んだ和歌とされている)をじっくり鑑賞して

からお目当ての「源氏庭」へと歩を進めた。

松の緑と青楓、敷きつめられた細かな白石の中に浮かぶ幾筋もの苔の島。それぞれの島から紫式部に因んでか紫の桔梗が茎を伸ばし、清楚で気品のある花々が、緑と白と見事な対照をなし、人々を釘付けにしていた。同じ京都でも、龍安寺・大徳寺・建仁寺などで見られる枯山水の名園とは違って、狭いながらも心の中がほのほのとしてくるような安らぎを覚えた。桔梗の花が与えてくれた至福の空間と時間であった。

その日の午後、源氏庭で桔梗の花と対峙して、凡そ二時間ほど費やしたと思う。陽が傾いてはいたが、まだまだ明るく、もっと居たかったが閉門の十六時が迫っており、後ろ髪を引かれつつ立ち去った。

その日から十八年後の平成二十年の八月下旬に、指導句会の女性会員七名を引率しての京都観光で久方ぶりに廬山寺を訪れたが、予定時間が遅れていたために、肝心の源氏庭の鑑賞時間が短く大変残念であった。

三度訪ねてみたいと思っっている桔梗の庭であるが、近年、外国人観光客を含め、京都の

観光地がごった返しているようなので、ほぼ三十年前の初回の想い出を大切にしている方が幸せだと思っっている。

この記事の執筆を依頼されたことが契機となつて、あの時の最高の時間が蘇つてきた。

桔梗に知るよしもなき微笑かな かな女
桔梗にいつ旅衣解かんとや 同
桔梗をや、めづるなり忌の人は 同

「水明」俳句会は、令和二年九月に、創刊九十周年を迎えるので、ここで初代・長谷川かな女の原点に立ち返り、新たな時代へ向けて自由闊達に再出発したいと思う。次に目標とする創刊百年を迎えるために……。

桔梗の朝一枝供ふ辻佛 山中 順子
背筋をしやんと師匠の矜持白桔梗 星野 和葉
白桔梗ビニール傘が飛びたがる 境 延昭
桔梗咲く朝確かなる深呼吸吸 茂木 和子
齡超えトルコ桔梗を手向けけり 網野 月を
桔梗や奈良井の宿の五平餅 五明 昇
伝来の壺にきちかう似合ひすぎ 大村 節代

一条の光に桔梗さゆる朝 加藤草太郎
尼寺の昼餉の仕度白桔梗 石山かつ子
一輪に茶室整ふ桔梗かな 日高 徹
桔梗や渡辺綱祖の系図 青木 鶴城
僧園の竹林の径桔梗濃し 保坂 翔太
沢桔梗湖畔の女みづいろに 西山貴美子
浮雲の白きに咲き初む白桔梗 小林萬二郎
活けられし桔梗山野の風たちぬ 椎野美代子
諳んずは憶良の一首白桔梗 大橋 迪代
君の海馬に我が痕跡は白桔梗 山中みどり
たつた一輪遊女の墓の白桔梗 矢作 水尾
桔梗咲く季にふたたびの万葉集 菊池ひろこ
師の声の風に咲きたる桔梗の紺 島津 初花
万葉の径に瀬の音花桔梗 石井 喜恵
微風や庭の桔梗を仏花とす 宇田 白鷺
桔梗や判官鼠貞の奥州路 藤澤 喜久
桔梗や愁ひをおぶる夢二の絵 荒井 俱子
桔梗の空へ展ぐる天賦かな 池田 雅夫
「源氏の庭」に桔梗さゆらぐ静ころ 梅澤 佐江
水遣りの女将の桶の桔梗濃し 野田 静香
桔梗やもう歌はれぬ校歌の碑 越田 栄子
桔梗や背にえにしの一つ紋 正木 萬蝶
廃村に残る墓石白桔梗 近藤 徹平

特集

私の好きな女性俳人ベスト3

—— 俳人評論家五十五人アンケート

巻頭作品10句

大石悦子・佐怒賀直美・島村正
白岩敏秀・高橋道子・西村和子
二ノ宮一雄・船越淑子

俳壇

12月号

11月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
神作研一

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句II……山本一步・田口紅子

俳壇史エピソード……坂口昌弘

続・日本の樹木……広渡敬雄

俳句における「写生」の周辺……栗林浩

近代女性俳人伝……坂本宮尾

特別寄稿 田中裕明小論……対中いずみ

俳壇時評……松下カコ／俳壇月評……しなだしん

俳句と随想12か月 はりまだいすけ・江崎紀和子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話 03(3294)7068 振替00100-5-164430

角川「俳句」別冊(カドカワムック)

12月7日
発売予定

予価3000円(税込み)

俳句年鑑 2020

年版

2018.10 ▶ 2019.9

口絵

二〇一九年一〇〇句選……正木ゆう子選
写真でたどる二〇一九年の俳壇

【巻頭提言】

仁平勝

年代別 二〇一九年の収穫

諸家自選五句……約六五〇名!

今年の句集BEST15

四協会の一年
各俳句賞のひとびと

今年の評論BEST7

ほか

合評鼎談

西村和子・佐藤郁良・鶴田智哉
今年の秀句を振り返る

総集編

〈平成俳壇「心に残る秀句」発表!〉

●全国結社・俳誌 一年の動向 都道府県別目次付き!

●全国俳人住所録 約三〇〇名を一挙掲載!

KADOKAWA

発行:角川文化振興財団 発売:株式会社KADOKAWA

●お問い合わせ先(注文) TEL.049-259-1100(読者係)

第3回 水明塾 を終えて

研修部長 境 延昭

台風十九号の直撃とその後の低気圧による水禍の後、十月二十八日予定どおり第三回水明塾を開催することが出来ました。水明塾は将来にバトンを繋ぐための全国大会に次ぐ大事な事業と考えています。五月のゴールデンウィーク直後から研修部で原案を練り、二回の幹事会に諮り運営要領を決定した上で常任幹事全員の協力を得て運営に当たりました。

当日参加の受講生は三十八名、運営の常任幹事九名合計四十七名。全員が顔の見えるロノ字に着席しました。初めての受講者が七名、第一回から三回とも参加の人が十八名を数えました。五明事務局長が司会担当。

朝九時、山中幹事長の開会挨拶で始まりました。

主宰のお話と講義

主宰就任後最初の水明塾であり、主宰に「水明俳句の目指すもの」をお話頂きました。講義は網野月を氏に「俳句における切れ」のテーマでお願いました。それぞれ明解なお話で丁寧なレジュメが準備されました。内容は水明の正月号に掲

載予定、参照下さい。

句会

今回は参加申し込み時に、兼題「唐辛子」と「手」の詠み込みで二句を事前投句、予め清記を済ませて当日に臨みました。互選三句の披講を大村節代さんと石山かつ子さん、記録を茂木和子さんが担当しました。

主宰選は後にして、ここでは作者は名乗らないのが水明塾初回からの方法、忌憚のない相互討議を期待してのことです。

相互討議

境 延昭が進行を担当しました。投句の後は句の解釈と評価は一切読み手次第。作者不明のまま、句の問題点を指摘し共同でブラシユアアップするのが狙いです。通常の句会では主宰者の講評に待つところですが、それぞれが思うことをぶつけ合う事を期待しました。受講者全員の発言がありました。

主宰の選と講評

特選、準特選そして入選の三段階に選。先ず選に洩れた句からその理由を指摘の上添削がされました。先の互選で無点句が特選に入り、高得点句が入選に留まったり、それぞれ参考になった事と思います。

(特選)

秋夕日繋ぐ手ここにある幸せ

菅原 真理

野仏のおん手に遊ぶ桐一葉
たうがらし近くて遠き国憂ふ

手鏡の彫りの深さや敬老日

「ドア飾るリースにどうぞ」たうがらし

元氣に行こうー唐辛子真つ赤つか

香煙の功德を手繰る秋遍路

〔準特選〕

新蕎麦を捏ねる米寿の手糲（たすき）かな

幼子に確と我のあり唐辛子

大陸の風の香や唐辛子

国籍は敢へて問ふまい唐辛子

笨いっぱい笑顔の彼の唐辛子

「一葉」の手押しポンプや秋夕焼

肩に背に手にはらはらと寺黄葉

二次会の会費は片手運動会

唐辛子妻の爪よりまだ赤し

〔入選〕

花形はリレーの選手運動会

唐辛子意地を張り合ふ店と客

唐辛子最初に食つた奴は誰

束にして厨を飾る唐辛子

ひしやくほど辛さ増しをり唐辛子

手を翳し行方見守る蒲の穂絮

如何様にしても手折れぬ野の薄

神田 治江

渋谷きいち

梅澤 輝翠

山口 韶子

太田 絹映

近藤 徹平

保坂 翔太

越田 栄子

阿部 幸代

青木 鶴城

河野はるみ

野田 静香

田村 節子

染谷 正信

菅原 真理

森下美智枝

反町 修

近藤 徹平

鈴木 和子

大塚 茂子

原田 秀子

太田 絹映

爽やかや宙飛ぶしぐさ女形の手

ぴかぴかな菜園の星唐辛子

唐辛子いはくありげなてかりぶり

爽やかや駅の二人の手話弾む

釈迦像の御手の水掻き秋深し

りんどうを手向くる母の小さき背

唐辛子ぴりつと効かせ嫁姑

なべ振りてほのほ蕃椒宙に舞ふ

躍り手が村に揃ひて秋祭

手習ひの子頬に墨つけ梨を食む

米櫃に紅白映えし唐辛子

白壁や逆さ吊りさる唐辛子

唐辛子地蔵のべべと競ふ赤

焰かな遠見の畑の唐辛子

鷹の爪散らすパスタにこだはる夜

たうがらし並ぶ筵が浜染むる

田舎家に魔除けのごとく唐辛子

店先に花東のごとく唐辛子

温め酒志野のぐい呑み手に馴染む

手の内を見たくば見せむ威銃

束ねられ古民家の軒唐辛子

秋の風亡き夫宛に来る手紙

角曲るまで手を振る母に櫛紅葉

蝸のいのち手のなか震へをり

西幅 公子

下川 光子

曲淵 徹雄

山口 韶子

諏訪サヨ子

外村 紀子

笹本 啓子

杉浦 理恵

河野はるみ

田中 章嘉

落合 和枝

加藤でん治

梅澤 輝翠

宮崎チアキ

野田 静香

田村 節子

染谷 正信

森 和子

常住 朝子

青木 鶴城

外村 紀子

笹本 啓子

湯浅 和

杉浦 理恵

手で受けし音なき山の飛ぶ星を
 手の甲にトンボ憩ふは庭の如
 階段の手摺ひややか朝日さす
 干されてもまだまだ赤き唐辛子
 手をつなぎ支ふる仲間秋の空
 不揃ひの手打ち蕎麦かな暮の秋
 薄黄葉かはるがはるに手水鉢
 唐辛子モダンアートの赤と青
 麻紐に吊るされ並ぶ唐辛子
 背伸びして石榴挽ぐ手の若やぎて
 秋うらら手のとどくよな水平線
 文化の日檻襖離さぬゴリラの手
 絵手紙につたなき文字や敬老日
 知らず食み大泣きの子や唐辛子
 姑より強き嫁御や唐辛子
 陽の当る位置に鎮座の唐辛子
 万願寺たうがらし添へ御番菜
 箱車それぞれの手に秋桜
 秋彼岸手水のマナーを問ふ子供
 新蕎麦を打つ手躍れるガラス越し
 秋の日の手紙に俳句加へたり
 唐辛子陽を独り占め真つ赤つか
 唐辛子添へて織部の小皿かな

俳句に関する疑問質問

仲田 利子	落合 和枝	加藤でん治	秋山 紅花	宮崎チアキ	渋谷きいち	森 和子	大槻 瑤蘭	諏訪サヨ子	阿部 幸代	曲淵 徹雄	下川 光子	越田 栄子	西幅 公子	保坂 翔太	神田 治江	原田 秀子	大塚 茂子	鈴木 和子	反町 修	森下美智枝	蔵重 山遊	常住 朝子
-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------

- 予め事前に四人から四つの質問が寄せられました。
 主宰をはじめ運営役員に解答願いました。
- ① 文語体、口語体について迷っている。
 - ◇ 文語体は固有の韻により句が締まる。水明は文語体（旧仮名遣い）が基本だが内容により口語体を否定はしない。
 - ◇ 一句の中に文語と口語が混在しては駄目。
 - ◇ 文語、口語それぞれ旧仮名、新仮名と四つの対応があるが、水明では文語体＝旧仮名遣いが原則。
 - ② 推敲の際、誤字・脱字や季重なりなど基本的なこと以外に注意すべきことは何か。
 - ◇ リズムが大事で、声に出して読んでみる。
 - ◇ 助詞の使い方が大事。短文で書いてみるの必要。
 - ③ 季重なりはどこまで許されるのか。
 - ◇ 季重なりは避けたい。避けられない場合は兼題が主となるよう工夫する。
 - ④ 季語と内容の距離感。近すぎ、離れ過ぎの兼ね合い。
 - ◇ 句をたくさん作ることで距離感が分かってくる。
 - ◇ 付きすぎの句が多い。離れすぎると理解できずに無意味な句になってしまう。
 - ◇ 関連して季語の本意に質問があり、本意を大事に、少々外しても響きあうものがあればよい。とのことでした。
- 解答に微妙な差のある所でした。
 時間となり、星野編集長の挨拶で閉幕。

水明例会



第一例会（浦和）

茂木 和子
延昭 報

急流に任せ無心の下り鮎
 椽の実や低く洩れ来る湯揉み唄
 柝降つて山家の一ひと日始まれり
 馬車で行く新任大使秋高し
 椽の実の落つる夜明けの通り雨
 案内は特任教授秋の古都
 運は天に任せて老いぬ月天心

治子
マスマ
大場順子
延昭
由紀子
徹平
光弥
以上特選

第二例会（東京本所）

太田 絹映 報

椽の実が古き駅舎を打つばかり
 朴訥な男の意地や椽の実吊る
 任侠を気取りし男にこり酒
 椽の実の転ぶ山莊りス渡る
 任侠が大見得を切る秋祭
 責任を果たし一等運動会
 任侠の台詞堂々村芝居
 子に任せ肩の荷下りぬ実紫
 柝木つ子椽の実拾ひ餅せがむ
 頭に肩に柝の実はづむ庁舎裏

延昭
喜恵
節代
チアキ
由紀子
はるみ
マスマ
大場順子
理恵
治子
峰雄
昭子
礼子

第三例会（東京）

五明 昇 報
曲淵 徹雄

色鳥や来世も人になれるかや
 秋深し空のままなる金魚鉢
 秋風や三み圍りまでの往き帰り
 行列の先は鯛焼き秋日和
 秋風の仙石原に迷ひをり
 秋の蝶石段過る竹生鳥
 温暖化止めねばならぬ秋出水
 月の出を待ちわびる児の白団子
 どんぐりにほんの少しの手の温み
 秋うらら酢橘とクッキーのお裾分け
 数多の命奪ひし令和の大自然
 長き夜の電子手帳に季語さぐる
 落葉ふみ今朝の散歩は遠回り
 秋天や合掌造りの巨き屋根
 才媛の箏りサイタル秋惜む
 大山詣の豆腐づくしや秋彼岸
 秋場所の呼び出しの声高らかに
 托鉢の声に目覚むやそぞろ寒
 腰痛を押して戸外へ秋日和

以上特選
竺仙
陽子
登志子
礼子
玲子
寿恵
峰雄
藤夫
昌弘
昭子
絹映
昇 報
千穂
みどり

車椅子押されて秋思押すもまた
来し方を三面鏡に見る秋思
それぞれの意志が 一花に曼珠沙華
旅そぞろの口三味線に荻の風

みどり
康世
稲雀口鉄砲にたぢろがす
稲雀散つて光りの礫かな
丸木橋渡る下校児稲雀

昇
喜恵
以上特選

ほろ酔ひの山歌所望秋の暮
菊の香に遺影の父の肩なら
演目の世話物に泣く秋の暮
駅飾る黄菊に浮かぶ好日翁
縁談のまとまる知らせ菊日和
会釈せし巫女の黒髪菊薫る
米寿なる句友を送る菊の雨
しみじみと人の恋しき秋ゆふべ

以上特選
萬二郎
はるみ
美佐尾
理恵
水尾

秋思なほ不羈もて余す放れ駒

以上特選

バイク停めエンジン切るや秋の声
踏みしだく窯の陶片秋の声
近寄れば低き空へと稲雀

以上特選

義子

義子

命綱たぐり寄せつつ松手入

千穂

茅葺ひの豊饒の里秋の声
秋思ひの笛は秋声虚貝

翔太

光弥

朝子

朝日影と生まるる秋思かな

康世

母恋や吾が身に揺らぐかづら橋
ロイカル線に乗るための旅稲雀
次々に田んぼを替へて稲雀

昇

関西例会(大阪)

早苗報

一通の文に生まるる秋思かな

雅夫

竹林の瞑目すれば秋の声
ポップコーン爆ぜし如くに稲雀

曆文

黄虫鳴く草履にされし一張羅
捨てかがし十字架担ぎゆく農夫
勇猛な桜の戦士新走

ゆら女

老いをさらりと昭和の味のむかご飯

祥絵

行く雲の影おく池塘秋の声
空騒ぎしてゐる如く稲雀

玲子

少年の声よく透る鯨日和
噴煙に焦げもせぬ山紅葉濃し
おでん煮るのれんくぐれば昭和かな

早苗

秋淋し昨日と同じ部屋に居て

喜久

丸木橋渡りきりたる秋思かな

寛治

黄虫やガラスビル拭く命綱
鬼の子の漂泊はじまる空の青

玲子

シネカーに秋思を揺らすバーアンダー

昇

第五例会(浦和)

梅澤

黄虫の舞姫となり風を呼ぶ
穂芒に匿はれ行く袖の道
みの虫まで絶滅危惧となる世紀
千曲川令和の秋に牙を剥く
黄虫や揺るるゴンドラすれ違ふ

道子

第四例会(浦和)

境
石井 延昭
喜恵 報

遠野路は行き交ふもなく秋の声
ブナ林の葉擦れの降りし秋の声
払暁の厠の窓に秋の声
庭師去り暮色の中に秋の声
切株にはじまる石化秋の声

水尾

以上特選

千津子

遠野路は行き交ふもなく秋の声

でん治

秋の暮今日締め括るひとり酒
焼印の押されし校具秋の暮
物売りの声が遠のく秋の暮

義子

以上特選

礼子

庭師去り暮色の中に秋の声

玲子

鉢力屋の錆びし戸袋秋の暮
神苑に菊の白妙巫女溜り

朝子

以上特選

早苗

切株にはじまる石化秋の声

恵子

神苑に菊の白妙巫女溜り

佐江

以上特選

玲子

ずたずたの列島よそに鳥渡る
鬼の子に夜は満天の星飾り
蓑虫の惰眠覚ますや魚鼓打つて
城門の弾痕に指破連
一日の至福の床に蚊の名残

敦子
ゆら女
和子
道子
智恵子

婦人句会（浦和）

西山貴美子 報

栗ご飯よく噛んでゐるお年寄
水底の日暮見てゐる暮の秋
焼栗の匂ひ駅まで付いてくる
栗の皮剥く災害の記事の上
一番手二番手と草暮の秋
鳥鳴くや父母なき山河暮の秋
雨を吸ひ雨を弾いて栗の実落つ
メール来て婆婆友ランチ栗ご飯
暮の秋心に刺さる事もなく
焼栗を剥く熱熱の掌

さく子
由紀子
順子
光子
愛子
ひさの
貴美子

毬栗に睨まれてゐる起居かな
栗の毬眼を見開きて我を待つ
キツチンの明りに親子栗を剥く
栗をむき四方山話切れ目なく
銘入りの小刀で剥く丹羽栗
毬捌く長くつ姿栗ひろひ
すべすべの少女に貰ふ栗の毬

以上特選
さく子
順子
光子
愛子
由紀子
ひさの
貴美子

若松句会（京橋）

菊池ひろこ
石田慶子 報

冷まじや十三日の金曜日
酒林冷まじ三輪の社かな
行き場無き汚染土の高冷まじき
冷まじや今も堅固な穴太積み
冷まじや友の余命を聞きし夜
冷まじや杉の梢に星ひとつ
冷まじや君の背骨もステッキも
俯瞰する街の青色冷まじや
蛤御門に残る弾痕冷まじや
街灯の蒼路面に刺り冷まじや
冷まじや上手に開かぬコンビーフ
冷まじや止め具ずれたる丸木橋
風おこり満月揺るる夜となりぬ
ダイヤ乱れ潰さるラツシユ冷まじや
云ふことは云つてみたけど蚯蚓鳴く
半月ぶりの妻の御帰還冷まじく
冷まじや野辺の吟行茶屋遙か
空耳の翅音冷まじ蔓を引く

萬蝶
千春
佐江
鶴城
俊晴
ひろこ
以上特選
千春
佐江
はるみ
慶子
鶴城
俊晴
理恵
月を
知勝
儀勝
ひろこ

水明発行所受付時間

曜日：(月・水・金)

時間：午後1時から午後5時

(火・木・土・日・祭日は休み)

(上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内をお願いします。)

各地句会

野菊の会 (与野)

快晴の空に至近の紫苑かな
紫苑ゆれ九九の暗誦ひとしきり
冷やかや握りたき手の見つからぬ
フアッション誌聞く紫苑の咲くころは

俳句の手ほどき (岩槻)

鳴く虫に闇の深さを計りけり
レモン齧り二十の記憶呼び覚ます
邪馬台国の揺るる真説新走
無住寺の不審伝説死人花
説論する父の本気や初時雨
れもんは黄色海はいよいよ紺深く
新聞小説「了」となりたり秋惜しむ
菊月や永字八法説き論す
説法の長き法事や神無月
得々と釈迦に説法秋の蝶

草太郎 延昭 翔太 徹平 かつ子 水尾 佐江 義子 倭子 忠男

レモン酸っぱし時効となりし事いくつ
駅構内の物産展や秋の昼
ペナルティキック吸ひ込まれゆく秋の昼
放つ香のレモン人心一新す
抱くものに膝と希望と檸檬二ヶ
水明大阪句会 (守口)

ます美 美佐尾 藤十郎 慶子 順子
神戸大池句会 (神戸)
ふくよかに笑まふコスモス舞妓はん
木犀の香を繋ぎ行くくらし途
親しげに狭庭を宿と小鳥来る
オカリナなのやさしき音色敬老日
早苗 礼子 千津子 玲子

千年の月日を孕み蓮は実に
人住まぬ実家の柿のたわわなる
一点に鴉尾の反りざま秋高し
秋風や昔は海の底なりし
風の指揮オーケストラや秋の虫
空の下復興支援の秋刀魚焼く
一里塚過ぎて山家の曼珠沙華
和子 清子 光子 美代子

ゆら女 洋子 ヒサ子 一木 智恵子 卓也 人美
水明鬼石句会 (鬼石)
どろんこの松茸届く昼下がり
マネキンの美人すぎたる案山子かな
煩惱のハカに鼓舞され秋夜長
秋出水螺旋階段かけのぼる
勝ち進む男子バレーや秋の夜
洋子 和子 聡子 紀子 ナオ子

ミモザの会 (横浜)

新聞と葉袋とある秋思
キヤツシユレス何とかP.A.Yにある秋思
年経るも腑におちぬこと秋思ふと
秋思ふと杖の行き先右に向く
青春さつぷボックス席の秋思かな
久久の孫の夜泣きや秋思断つ
菊枕きみの腕を恋ふ夜の
菊枕二つ並べて夜の明くる
待ち人よノックは二回菊枕

由美子 慶子 栄子 知子 玲子 亜弥子 萬蝶 史代 千春
以上特選
若狭水明会 (若狭)
掌で頂く栗の重さかな
大栗や落ちて大地をノックする
売切れの札恨めしき栗おこは
狭き溪それでもがらんと刈田かな
白鷺のふはりと其処に刈田風
ツリーングの爆音残し刈田かな
栗笑ふ双子三つ子の寄り添うて
刈田道田烏弁の鯛売り
風吹くや気の向くままに刈田道
刈田原終止符を打つ安堵かな
減反に行く末思ふ刈田かな
初花 和風 白鷺 冬至 保人 郁鼓 寛久 祥子 想子

新樹の会 (浦和)

露寒や引出しの奥燐寸箱
菊の宿から望む鉄橋寸又峽
一筋の雨戸の隙間朝寒し
北海や空を濁して鳥渡る
子等多き時代の校舎鳥渡る
朝寒み内より冷ゆるサドルかな
秋の蝶寸暇を惜しみ花めぐる
鳥渡る師の逝きし日の空もまた
菊の香やロマン漂ふ光堂
たかなな俳句会 (川口)
橋の上夕日に染まる鶴鶴よ
つくばひにひとり遊びの石たたき
秋の川隧道抜けても秋の川
天空の深さ映して秋の川
秋の川面影橋の暮れ残る

かわせみ句会 (浦和)

鶴城 清吉 宜子 平通 京子 韶子 紅花 微 ぜん治
敏子 智子 順子 良枝 信子 保子

歳時記をゆつくり繰りぬ夜の長き
長き夜や人物辞典の紐を解く
大利根に船宿ありぬ萩月夜
和歌山水明句会 (和歌山)

青葉の会 (浦和)

朝日射す氾濫の川鳥渡る
見沼田の夕日隠れに小鳥来る
スーパ一の松茸ちらと見て通過
渡り鳥馴染の田んぼ忘れずに
キャンプ場眠る湖畔や小鳥来る
瓢湖にも早や訪れし渡り鳥
きざきサークル (浦和)
オカリナのフラット一音秋惜しむ
数珠玉の芯抜く父の武骨な手

友子 治郎 育子 和子 道子 千世子 満耶子 美恵子 洋子 廻代 美子 啓子 公子 洋子 和子 輝翠 千種 喜代子

合唱の若き歌声秋惜しむ
見沼田の入り日眺めて秋惜しむ
数珠玉や母とうたひし戦歌
グレーヘアこれもし生き方秋惜しみ
数珠玉のお手だま遊び母が縫ふ
数珠玉に糸を通して首飾り
数珠玉や水路に小さき橋いくつ
野ばらの会 (浦和)
ちちろ虫空家に残るみざり機
松茸の舌を満たして言盗む
松茸ご飯香りて目覚む今朝の空
微温き湯に肩まで浸かり聴くちちろ
おもたせは松茸狩りの名人と
松茸や視線集まる焼け具合
ちんちろりん我の散歩に連れだちぬ
コクノシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)
虫の声外階段に煙草の火
白樺の囲む露天湯虫の声
覚束ぬ鷺の足取り苧田かな
新米や赤き玉子に黄身ふたつ
売り出しに新米添へて景気づけ
秋の夜むらさき色の詩集買ふ
大富士や光の海となる芒
木の実落ちそぞろの旅に句読点

カツ子 啓子 俱子 タイ 和枝 雅代 和子 茂子 治江 和子 秀子 夏江 栄子 みき子 延昭 正信 佳代子 俱子 俊晴 光子 美枝子 昇

芽吹句会 (浦和)

湖にとつとなだるる照紅葉
飽食の異人会やそぞろ寒
体験の絵付の皿や照紅葉
唐松の黄葉あやなす別天地
楓もみち朱の濃き胸の二天像
はとバスでぶらりお江戸の紅葉狩
喰ひ違ふ親子の思ひそぞろ寒

櫻蔭句会 (浦和)

沢石に挟まる胡桃抜いてやる
実南天色なき庭に紅をさす
どんぐりや子を抱くことのみ腕
木の実両手に拾ふ園児の赤い靴
秋の霜あびて葉野菜しまりけり
銀杏を炒れば古里匂ひだす
秋霜や名知らぬ草の茎の紅
紫蘇の実を天ぶらにして母忌日
里山に入ればわくわく栗拾ひ
払暁の堂塔しんと秋の霜

鶴川山百合句会 (鶴川)

桔梗咲く年寄り家庭に貴重なもの
雄雌の議論はにおいて秋刀魚焼く
謀反にも理由はありけり桔梗花

玲子 千重子 チアキ 朝子 富子 微
眞理 由紀子 美子 公子 美紗子 多美子 美智枝 幸代 マスミ
八洲男 廉三 雄二郎

遠くから見ているだけで白桔梗
みちのくの判官量沢桔梗
借景に浅間を置きてをみなへし
夫婦別姓雌雄別株秋の雨
きちかうやわが家は五人小市民
枝折戸の押しして桔梗を見にゆけり
お手玉になりさう桔梗の蕾ぼん
やんごとなき姫の化身の白桔梗
胸板の厚き雄姿や秋澄める
紫の脈しつかりと花桔梗

水明熊谷句会 (熊谷)

到来の松茸に妻憂ひ顔
板一枚敷きて路傍のしめぢ売り
缶蹴りの蹴りあく音量鬮雲
採れたての茸商ふ飛驒の朝
吾子の折る紙飛行機や鬮雲
鬮雲並んだ線は宇宙船
風が出て早目の帰宅茸狩
鬮雲赤城に向かひダバダバダ
青空をすつきり占める鬮雲
兄嫁の秘密の漏路茸狩

大宮読売俳句教室 (大宮)

吊橋を揺らし紅葉の客となる
散り急ぐ桜紅葉は手のひらに

月を 喜久 史代 広子 知子 由美子 千春 萬蝶 理恵 玲子
草太郎 燈女 栄子 秀子 治江 正行 裕平 和子 茂子

秋祭硬貨にぎりし吾子奔る
お囃子の顔馴染み減る村祭
秋祭り明日は南へ露天商
村祭土間に舟吊る旧家かな
友の去りにて主なき家蔦紅葉
桴捌き自在の乙女秋祭
舶来のベレーが欲しき黄落期
稜線まで色を重ねて夕紅葉
年毎に低く嫗の吊し柿
鮎落ちて那珂川宿の灯の淡し
首飾りかける手付きで柿を干す
帯解けばはさみし紅葉舞ひ落ちる

あゆみの会 (浦和)

手から手へ抱かるる嬰兒菊の宴
倒木に絡みつきたる烏瓜
烏瓜身のうちになほ余燼あり
地芝居の人情話で泣き笑ひ
からすうり夕日に映えて真つ赤か
色の無き風吹く集ひ老人会

桜林句会 (大宮)

ざわざわと森押し分けて今日の月
襖絵に月光とどく献茶式
夕月夜扉開かれ大伽藍
病院の窓より月のみな無口

卓郎 サヨ子 紀夫 弘雄 徹太 翔太 正信 君夫 好子 典子 治子 順子
主子 重子 朋子 和子 山遊 藻好
光子 一恵 知子 美佐尾

山茶花 (浦和)

秋ふかし夜更けてちろちろ鳴く声が

岩肌を紅葉彩どる妙義山

ひとり居の小鍋に夕餉秋深し

秋深し寂光まとふ野の仏

捨てかねし父の賜杯や秋深し

紅葉や道路拡張ボーリング

秋深し林中響く婚の鐘

けやきの会 (東京)

夜遊びの鯉がさらつてゆく秋思

芙蓉一輪咲き残りたる老人館

熊の剥製またぎの宿にある秋思

水明松本句会 (松本)

梳る人魚の像やいわし雲

松茸を嗅ぐだけにして通りけり

再延期小雨で強行運動会

台風にハザードマップ再確認

最終章の余韻たのしむ星月夜

泉月の会 (浦和)

秋しぐれ最終章に浸る夜

白檀の香る仏間や秋の暮

千年の梢に優し秋しぐれ

ふるさとの山並かすむ秋時雨
柳散る湯の「城崎」を一人旅

傘に入るふたりの銀座柳散る
柳ちる糸ひくやうに滑るかに

櫛の会 (浦和)

灯火親し明日の試験に仇取られ

灯火親し余韻深深子規句集

ふるさとを思ひ出しみる菊膾

菊膾法事の膳をひきしめり

灯火親し子の音読に引き込まれ

菊膾芭蕉の膳にも旅の宿

電子辞書に「可変」確認灯火親し

一膳の風趣をかもす菊膾

天災の恐さ語りつ菊膾

疎遠なる人なつかしき菊膾

灯火親し迷ひあぐみし助詞一字

蛸の会 (浦和)

道迷ひビルの谷間の秋の蝶

女子旅よ右へ左へ赤とんぼ

野生馬の光るたてがみ天高し

台風禍ペテルギウスは黙禱す

黒潮の香なつかし焼秋刀魚

逢瀬の地むかしのままに残る虫

芒原原つばというほどもなし

久子

節子

暦文

さいち

萬二郎

裕之

克之

優子

朋子

かよ子

富子

彰二

千重子

光子

治子

るみ子

元美

幸子

礼子

さち子

鶴城

月を

光が丘俳句教室 (東京)

捨案山子極悪面を晒しをり

交番の鉢楯コスモス揺れてをり

コスモスと青空のみの映の駅

畔の案山子タキシード着て睨みをり

ゑのころや風のことでも語らうか

入り日浴び顔を染めたる案山子かな

はこべ句会 (浦和)

明日もまた生者でいよう秋の蜂

松茸飯婢座に在れば母を恋ふ

獣の目夜は光りて月夜茸

倒木にほつほつ生るる茸かな

きのこ汁子等はそつぽを向きにけり

母と子と会話続かず秋うらら

子規庵の糸瓜みごとに七つ八つ

龍田姫月を鏡と眉ひくや

着飾りて胞子養ふ毒きのこ

芙蓉句会 (浦和)

丁寧に生きる余生や秋の風

秋霖や浅葱に煙るビルの街

秋暑し浅きねむりの夜明け方

爽籟に合はせどすこい甚かな

網を縫ふ漁夫秋風につつまるる

病む夫の浅き眠りや身にしみぬ

守伊

はる

康子

史子

野人

理恵

さく子

貴美子

美代子

和子

愛子

光子

ひさの

敦子

千穂

正子

道子

税子

知子

美加

仁子

加子

美子

加子

柿の木塾 (浦和)

にこにこ爺のほまちのにこり酒
どぶろくを腰に吊して杣の道
天に富士潮騒を聴く新松子
日本史や蔭に日向のにこり酒
濁り酒重くなりきし膝の猫
暮し向きさして変らず胡麻叩く
エアガンの的にされたる新松子
口三味線漏るる窓辺や新松子
父と兄酌むにこり酒われは下戸

かつ子
恵子
昇
光弥
水尾
節清
和葉
和子

船旅の白きトランク露寒し
芋掘りして大きさを比べ合ふ
芋畑ただただ広い見沼の地
露寒の走者の首のペンダント
花ごよみ句会 (浦和)
家家の明かり優しき暮の秋
残菊に支柱を確と水くれり
残菊に百葉箱の白光る

瑳蘭
むら子
輝翠
かつ子
和子
君子
ユリ子

姑ゆずり煮しめの味や秋祭り
虫の音の満ち行く峡の露天風呂
秋雨に山洗はれて光り合ふ
洗ひ髪風になびかせ秋夕焼
消費税上がりて虫の声高し
湯浴する網戸の外の手がれ虫
ほどほどの取り入れ終へて秋まつり
秋雨の洗ひし社祭来る
ペナルティキック外せば虫の闇
和子
栄子
むら子
きよ子
綾子
みや
千代子
藤十郎

りそな俳句会 (浦和)

草紅葉角のとれたる川原石
夕暮れて秋の簾に人の影
秋簾お役御免と捨て置かれ
草紅葉枯れゆくものの美しき
ゴンドラのすべる白馬の草紅葉
秋簾巻けば親子のへボ将棋
下京や昼を灯して秋簾

雅夫
寛治
克之
久美子
徹
曆文
マスミ

朝鳴キイーと鳴きてはじまる偏頭痛
アイシャドーは黒一文字鴉の洒落
汁の実に豆腐油揚げやや寒し
やや寒やすると外す婚指輪
猫は膝によく眠りたるやや寒し
やや寒の下駄箱にあるハイヒール
社家町を巡る小流れ鴉日和
漁火の消えてやや寒む膝がしら
やや寒や龍眼猛き天井絵
鴉日和びんびん尖る樹樹の影
やや寒し老斑の手をしみじみと
釣宿に鍼力のバケツ鴉高音

史代
和子
広子
和葉
かつ子
喜恵
マスミ
水尾
昇

☆ ☆

雛の会 (浦和)

掘りたての里芋届く土湿り
露寒し観葉の鉢取り込まむ
口中に里の温みを八頭
里芋煮る味見の箸をつるり逃げ

燈女
佐江
チアキ
喜恵

水明小川句会 (小川)
病む吾を慰撫して真夜の虫時雨

節代
光子
恵子
草太郎

追悼

加藤草太郎さん



親生まれ、尊敬され、愛された草太郎さんとこんな早く別れなくてはならないとはどうしても諦められない私の片腕となって行事部の重責を担い纏め五年を経た。そして次期行事部長として任せられると安心しておりました。

私とは何もかも分り合え、側にも寄れない前歴の彼に弟のように接していた。感謝したいがここに居ない。言葉が出ない。そしてふるさとを愛し秩父夜祭のご案内は圧感であった。

夜祭に酔うて仰がば冬銀河 草太郎

私の携帯電話に草太郎さんのメールが入っているが、これは永久保存になるでしょう。

街に出る道は一本枯野道 草太郎

数え切れない思い出を残してあなたは旅立ちました。惜しい、でもさよならだね。

ありがとうございます……。

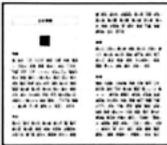
山中順子

俳句手帳 2020

『俳句』編集部 編



予定も句材も
たっぷりメモ!



充実の資料集

俳人必携の手帳が新登場。
来年のスケジュール管理は
これで決まり!

年間カレンダー、月間・週間予定表のほか、
俳句実作に役立つ情報が満載!

- 主な季語2400
 - 主な忌日
 - 難読季語一覧
 - 主な俳句賞の受賞者一覧
 - 文語文法活用早わかり表
 - 俳句関連主要資料館
 - 二十四節気七十二候
 - 和暦・西暦・年齢対照表
- などを収録。

『俳句手帳 2020』
定価(本体1200円+税)
A6判変形(87×148ミリ)/
皮革調ビニールカバー/
192ページ
ISBN978-4-04-884289-1

KADOKAWA

発行：角川文化振興財団 発売：株式会社 KADOKAWA

● 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 ● TEL.0570-002-301(カスタマーサポート・ナビダイヤル)

新春俳句大会のお知らせ

- [日 時] 令和2年1月30日(木) 午前10時受付 12時開会
- [会 場] さいたま市民会館うらわ 1階101集会室
さいたま市浦和区仲町2-10-22 TEL 048-822-7101
JR浦和駅西口より徒歩10分 浦和ロイヤルパインズホテルの裏 案内図参照
- [投 句] 2句 当季雑詠・初の入った冬の季語 締切11時
- [会 費] 5,000円 (昼食・お茶・懇親会費を含む)
句会のみの方2,000円 (昼食・お茶を含む)
- [懇 親 会] 句会終了後、同じ101集会室に於いて開催。午後5時終宴予定。
- [申 込] 参加費を添えて、1月15日までに、発行所総務部までお申込み下さい。

*当日は、第一例会の皆様で会を運営していただきます。

水明俳句会行事部



水明創刊 90 周年 記念祝賀会・全国大会のご案内

■記念全国大会

日 時 令和 2 年 6 月 29 日 (月)
受付開始 9 時 30 分 開会 10 時 閉会 15 時 30 分
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
4 階「ロイヤルプリンセス A・B」
〒 330-0062 さいたま市浦和区仲町 2-5-1 ☎ 048-827-1111
行 事 水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞の授賞、記念特別作品
の授賞、新誌友紹介者の表彰、新季音同人、新同人の紹介、
兼題入選句の発表・受賞・講評など

■記念祝賀会

日 時 令和 2 年 6 月 29 日 (月)
受付開始 15 時 30 分 開会 16 時 閉会 19 時
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
4 階「ロイヤルクラウン A」(住所、☎は全国大会と同じ)
行 事 来賓挨拶、俳壇著名人のビデオメッセージ、大福引大会など

■参加費 (5 年前の水明 85 周年記念祝賀会・全国大会と同額)

記念全国大会・祝賀会 25,000 円
記念全国大会のみ 8,000 円
記念祝賀会のみ 20,000 円

■宿泊斡旋

宿 泊 日 令和 2 年 6 月 28 日 (日) および 29 日 (月)
宿 泊 先 ロイヤルパインズホテル浦和
宿 泊 費 シングル 11,500 円 ツイン 10,500 円 × 2 = 21,000 円
*ともに朝食・消費税・サービス料込み
*料金は令和元年 7 月現在のものです、今後変更の可能性あり
*支払いはチェックイン時にホテルへ直接お願いします

■申込み・締切 未定 (追って詳細をお知らせします)

◎減多に無い貴重な機会です。ベテランはもとより、新入会員の方々も
お誘い合わせて多数ご参加下さい。みんなの力で祝賀会・大会を盛り
上げましょう。

水明創刊 90 周年記念事業 実行委員長

水明創刊 90 周年 記念特別作品募集

記念祝賀会・記念全国大会のご案内の通り、水明創刊 90 周年を記念して、下記の要領で俳句・エッセイ、評論の各部門の特別作品を募集いたします。

選考委員以外はどなたでも応募できますので、奮ってご投稿下さい。なお、受賞者の表彰は 6 月 29 日の記念全国大会で行います。

応 募 要 領

【応募資格】 選考委員を除く全ての水明会員。

【応募部門】 ①俳句作品：30 句（400 字詰原稿用紙を使用）

②エッセイ：1 篇（400 字詰原稿用紙 6 枚程度）

③評 論：1 篇（400 字詰原稿用紙 12 枚程度）

◆原稿用紙は各部門ともに、タテ書き用 B 4 判 400 字詰を使うこと。

◆文字は、選考委員が容易に判読できるよう楷書で丁寧に書くこと。ワープロやパソコン入力による原稿も可。

◆いずれも未発表作品に限る。（水明誌および外部に発表した作品は不可）

◆最初のページの 1 行目に表題（タイトル）を書き、その下に姓名（俳号）を書く。

◆複数部門への応募も可。

【応募締切】 令和 2 年 3 月 31 日

【作品送付先】 〒 339-0067 さいたま市岩槻区西町 5 - 6 - 38

山中順子 宛 *「記念特別作品」と朱書する。

【選考委員】 主宰・山中順子・星野和葉・境延昭・五明昇・網野月を

◆選考委員各自の選考結果を基に厳正に協議し、授賞者を決定します。

【授 賞】 俳句・エッセイ・評論それぞれの部門に授賞します。

正賞：各部門とも賞状と副賞 5 万円

準賞：各部門とも賞状と副賞 2 万円

◎ご質問・お問い合わせ

実行委員長 山中順子 (☎ 048-756-1253) へお願いします。

水明創刊 90 周年記念事業 実行委員長

風 声

○俳句界十月号―「この本この一句」欄で前北かおる氏が吉住光彌の句集『遍路』を鑑賞。

室の花一枝を加へ世の豊か

光彌

○俳句四季十月号―「季語を詠む・色変えぬ松」欄

色変へぬ松ぞ遺臣の裔の家

鬼之介

○俳壇十一月号―「ウルトラアイ・句集俳書展望」欄で吉住光彌の句集『遍路』を紹介。

人は皆遍路の途中鰯雲

光彌

骨壺に等級ありぬ湿り梅雨

花火終ふ緋りやうなき闇残し

○現代俳句十月号―「現代俳句年鑑二〇一九」を読む」欄

西門の守衛の蘊蓄金木犀

菊池ひろこ

男にはをとこの仁義涼新た

永野史代

三枚に秋刀魚おろしてイタリアン

野平美紗子

○天塚（宮谷昌代主宰）九月号―「珠玉一句」欄

薪能われは心の足はこび

鬼之介

○草笛（太田土男主宰）十月号―「受贈誌一詠」欄

小太りの鯉を主座に魚の棚

鬼之介

○くぢら（中尾公彦主宰）十月号―「受贈誌美術館」欄

月鉾に月が応ふる街の辻

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）九月号―「受贈誌拝見」欄

黒ビール乾し急先鋒の女A

鬼之介

○罇（山本一步主宰）十月号―「受贈誌の一句」欄

せせらぎの風を味はふ鮎の宿

近藤徹平

○太陽（柴田南海子主宰）十月号―「一誌一耀」欄

献上の夏の和菓子の子の和三盆

鬼之介

○天穹（屋内修一主宰）十月号―「主宰句紹介」欄

献上の夏の和菓子の子の和三盆

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）十月号―「諸家近詠」欄

思ひかよへば鈴蘭の鈴鳴ることも

鬼之介

○わおん（野本希容資主宰）十月号―「受贈誌拝謝」欄

思ひかよへば鈴蘭の鈴鳴ることも

鬼之介

❖原稿募集

季 音（雪・月・花）五句

水明集 五句（巻末添付用紙）

鼓笛集 三句（編集部より依頼のあった方）

水明通信・随筆等自由にお送り下さい。

原稿締切 毎月二十五日必着

原稿宛先 水明俳句会 編集部

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四―一〇―二二

水明発展基金御札

(敬称略)

—十月三十一日現在—

山本鬼之介	50	口	小島喜代子	5	口
丸山マスキ	5	口	中尾 笑子	5	口
日高 徹	5	口	反町 修	3	口
星野 和葉	10	口	匿 名	10	口
秋山 紅花	2	口	—合計—	100	口—
野田 静香	5	口			

誤植訂正

十一月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

歴代主宰の一句

- 誤 焼く手紙焼かぬ手紙や紙の留守
- 正 焼く手紙焼かぬ手紙や神の留守

六十三頁下段 後から七行目

- 誤 丈錠六の耳うつとりと月今宵
- 正 丈六の耳うつとりと月今宵

俳句

12月号 予告

11月25日発売
予価(本体864円+税)

特別作品 高野ムツオ・山下知津子・岸本尚毅

全句ふりがな付!

暗誦したい

冬の名句136

大特集

総論 暗誦のポイント……小島健

テーマ別 調べのよい冬の名句136

雪／神／天／地／時／火／家／食

鈴木牛後『にれかめる』

小論……仲寒蟬

座談会「牛と風土と……」

永瀬十悟×遠藤由樹子×松本てふこ

漢字四季折々……笹原宏之

宇宙のなかの孤独―近代人一茶……大谷弘至

好評
連載

特集句集

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA 0570-002-301(ナビダイヤル) <https://www.kadokawa.co.jp/>

後記

令和元年もこの月で終るが、天災の被害に会った方達の一日も早い復興を願わずにはいられない。私の故郷の千曲川流域の氾濫による農作物の被害は目を被うばかりである。契約しているりんご農家は山の上の方のため無事で真赤に実ったりんごが送られて来た。

この秋は皇室の行事が続き、天皇および皇后さまの御多忙は如何ばかりと心に案じた事も過ぎ、諸行事のご報告のため親謁の儀に伊勢神宮に臨まれていらつしやるお元氣なお姿に少し穏やかな気持ちになった。

水明も十一月の幹事会を以って今年度の事業の反省と来年度の行事予定を確認した。又創刊九十周年の記念行事も計画しているのをごで会員の皆様に一層のご協力をお願いします。一丸となって成功させたいと思います。本当に今年一年のご協力に感謝して来年の水明を盛り立てたいと思います。一

年間ありがとうございました。

(順子)

ある朝刊の記事の中に埼玉県の詩人宮沢章二の生誕百周年企画展の紹介記事が載っていた。新聞記事は余り熱心に読まないのだが何故かひかれて最後まで読んだ。そして次の一節に今更乍らに感銘。「(こころ)は誰にも見えなけれど(こころづかい)は見えない。(思い)は見えないけれど(思いやり)は誰にも見える」。詩「行為の意味」である。

今大げさに云えば日本中が優しさや思いやりに欠けていると思うので特に感じたのだろう。戦後一時公立高校で国語教師の経験をお持ちの宮沢章二、この思いは当時の生徒達に伝わっていると思う。歌の中にも「幸せなら手を叩こう」を態度で示そうよとある。何事も見える形で示す事。難しい。人間は何歳になっても欲ばり、もし私にもう少し詩心があつたらと、無い物ねだりが止まらない。これを態度に示すのは、とてもと

ても……。

(和子)

先日、さいたま市浦和俳句連盟文化祭俳句大会が催された。その中で、山田閔子先生(花鳥楽編集長・ホトトギス同人)により「高浜虚子の武蔵野探勝会」と題して講演があった。

武蔵野探勝会の第一回目は、昭和五年八月府中で催し、昭和一四年一月迄、一〇〇回に亘って行われた様だ。埼玉県では平林寺、浮間、狭山、大宮氷川公園など十ヶ所で開催されたという。参加者は高浜虚子をはじめ、山口青邨、高野素十、星野立子、中村草田男他全メンバーは二五名。

毎月第一日曜日に行われた様だ。今では考えられない事である。家毎に焙爐の匂ふ狭山かな 静かなる梅なき家や梅の村

虚子二句共

平成二七年七月、関西夏行の翌日、皆さんと芦屋市の虚子記念文学館に「大正期の女流俳句の変遷」(かな女の短冊なども出展)展を見学した事を思い出した。

(和葉)

水明

令和元年十二月号

通巻一〇七一号

令和元年十二月一日発行

発行人 山 本 一 鬼 之 介

〒330-0073 さいたま市浦和区野町一七二八
電話 048-886-1600三

発行所 水 明 俳 句 会

〒330-0064 さいたま市浦和区野町一〇二二
電話 048-822-1474一

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇〇〇一五三三九三

印刷所 中 央 美 版

季音抄 鬼之介

落武者の塚に榎の実五つ六つ
鬼の子に夜は満天の星飾り
亭主亡き茶室の庭に秋茗荷
若かりし頃のデニムを蒸し芋
捨て舟や鳴咽に似たる萩の風
観音の背中ふつくら新松子
下京や昼を灯して秋簾
秋さみし昨日と同じ部屋にゐて
四万十川に余生あづけて鮎下る
秋の夜の推理小説下巻へと
ポケットに甘栗菊花賞の馬券
長靴が産婆に変はり栗産まる
到来の松茸に妻憂ひ顔
神苑に菊の白妙巫女溜り
柏手のきれいに二つ妻の秋
草の実や野の子がひらく手の匂ひ
菊月や永字八法説き論す
マネキンの美人すぎたる案山子かな

山中みどり
由良ゆら女
吉住 光弥
網野 月を
石井 喜恵
石山かつ子
丸山マシミ
藤澤 喜久
柚木 治子
高島 寛治
渡辺 舍人
鳥羽 和風
故
加藤草太郎
梅澤 佐江
原田 想子
松井由紀子
森川 義子
野口 和子

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内

(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック▼

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内

(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆▼

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水明抄 鬼之介

点滅の止まぬ門灯秋暑し
 秋灯下キープボトルの千社札
 鳥獣戯画の巻物ゆるぶ十三夜
 ペン先を登る記憶や秋の潮
 サングラススタラップ降るる館ひろし
 散り残る萩の白さよ夕の風
 野仏に季節を告ぐる曼珠沙華
 禅寺の磴に色添へこぼれ萩
 コンビニの袋と遊ぶ秋の風
 秋晴のセンターポール日章旗
 急登の霧と鎖と力瘤
 陽は西に鈴虫ソロで始まりぬ
 法名に「月」在る夫よ十三夜
 月を待つ一本松へ連れ立ちて
 虫時雨山の出で湯を独り占め
 秋鱒の敲きですすむ手酌酒
 タンゴを踊り熱き身の内望の月
 野分あとやけに煌めく星のかず

曲淵 徹雄
 近藤 徹平
 正木 萬蝶
 大塚 茂子
 保坂 翔太
 野田 静香
 原田 秀子
 越田 栄子
 渋谷きいち
 日高 徹
 青木 鶴城
 河野はるみ
 太田 絹映
 加藤でん治
 染谷 正信
 田中 章嘉
 宮崎チアキ
 新 暦文

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3木曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保 ルノアル	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤江 河野はるみ
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋廸代	森本早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中順子	西山貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石田慶子

水明例会案内